

首の皮一枚

松本
雄貴

【登場人物】

- ・ コウ (父)
- ・ ミミ (母)
- ・ タカ (息子)
- ・ ルナ (娘)

①

コウ・アイザックの家。
リビングルーム。中央に食事するためのテーブルと椅子。
やや離れた所にソファ。
中央奥に2階に通じる階段。2階は夫婦の寝室とタカの部屋がある設定。
出入口となる玄関は下手。
その他、上手には「祈りのスペース」なる空間がある。
ミミとタカがテーブルに向かい合い食事をしている。

ミミ ……それで、面接はどうだったの？
タカ 全然だね。

ミミ でも、少しくらいは手応えあったんじゃない？
タカ だから、全然だって。

ミミ 本当に？ 少しの望みもないの？

タカ くだいよ、母ちゃん。…落ちたんだよ、俺。

ミミ まだ決まった訳じゃないでしょうに。

タカ いや、分かるよ。

ミミ そう。…パンのお代わり、どう？

タカ 食う。

ミミ (パンをタカの皿に置く) はい。

タカ (食べる) ああ、うめえ。

ミミ 美味しいでしょう。タカちゃんの就職活動再開を祝して、張り切って作ったのよ。ラザニアも食べる？

タカ 食う。

ミミ はい。お上がんない。

タカ ワインもくれよ。

ミミ お酒はダメよ。

タカ ちえっ。

ミミ ……母さんね、あなたが面接中、ずっとメシア様にお祈りしていたのよ。久しぶりに第一本門から第六本門まで通したの。小一時間ほど掛かったわ。

タカ それが逆効果だったんじゃないの。

ミミ トイレも我慢して、ずっとお祈りしていたのよ。だから、ちっとも効果が無いなんて変だわ。緊張がほぐれるとか、リラクセスできたとか、少しくらいは効果があったはず。

タカ ああ、そういう効果はあったね。

ミミ ほら、ごらんない。

タカ 面接中、とても暴力的な気分になっちゃって、面接官に暴言吐いちゃった。

ミミ まあ！ なんて子だろう！

タカ どうも母ちゃんのやってる事は、お祈りじゃなくて呪いなんじゃねー？

ミミ ……タカちゃん、それは本当なの？ 母さんを困らせようとして、わざとそんな事を言うんでしよう？

タカ 本当だよ。

ミミ 面接官に何を言ったの？ おっしやい。

タカ お宅の会社はどうも詐欺みたいですね、って言っちゃまったよ。

ミミ タカちゃん、あなた、もしかして詐欺会社の面接受けたのかい？

タカ 噂だけどね。

ミミ ……噂？

タカ 就活サイトの掲示板に書かれてたんだ。

ミミ どんな噂だったの？

タカ 働いてた元社員の証言だけど、年寄り騙して二束三文の土地を高値で売りつける会社みたいだね。…ま、俺は別に金貰えるなら詐欺でも何でも良かったんだけどねえ。母ちゃんの呪いが届いちまったから、言うつもり無い事、つい口走ってしまったんだよねえ。

ミミ ……(天井を見上げて) ああ、悪を司る西のメシア様に感謝致します。タカが危うく詐欺会社に就職するところを救って頂きました。アテベベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。
(クロスを切る)

タカ ……(うんざりしている)

ミミ ほら、タカちゃんも、ちゃんと祈りなさい。

タカ 俺はいいよ。

ミミ ダメよ。メシア様のお陰で詐欺会社に就職せずに済んだんだから。

タカ 受かってる可能性もあるよ。

ミミ さつきは全然だって言ったじゃないの。さ、早く。

タカ はいはいはい。(適当に)アテベベ・オブリガード・ナンタラカンタラ、ウンタラカンタラ。

ミミ こら！ 適当にやってはダメ！

タカ るせーな！

ミミ 母さん、たいがいの事は大目に見るけど、メシア様の事だけはふざけないで。

タカ わかったよ。

ミミ じゃあ、もう一度最初から祈りなさい。

タカ えーと、アテベベ、

ミミ アテベベ。

タカ えーと、

ミミ オブリガード。

タカ オブリガード、…えーっと、

ミミ いい加減覚えなさい。ウパニジャッターナ。

タカ ウパニジャッターナ。

ミミ で、右手をこう。(クロスを切る仕草)

タカ (同じくクロスを切る)

ミミ はい、もう一回。今度は母さん、何も言わないから。

タカ えー、アテベイベ、オブリガード、ウパニジャッターナ、(クロスを切る)

ミミ やればできるじゃないの。

タカ (ぼそっと) できたかたって、どうなんだよって感じだよ。

ミミ 何か言った？

タカ 別に。

やや間。

ミミ ……で、次の面接はいつ？

タカ まだどこも決まってるないよ。

ミミ そう。

タカ 全部、書類審査で落とされるんだよね。ようやく面接まで漕ぎつけた会社は、さっき言った詐欺会社だけだし。

ミミ でもね、焦る事はないわ。

タカ 別に焦ってねーけど。

ミミ ずっと家に引き籠ってたのに、働く気になっただけでも大きな進歩よ。

タカ どうせメシア様のお陰だって言うんだろ。

ミミ ええ、そうよ。でも、まだまだ足りないわ。もっともっとメシア様にお祈りしなくちゃ。

タカ 母ちゃん、いい加減にしてくれよ。

ミミ 何が？

タカ メシア様に入れあげるの。

ミミ 入れあげるだなんて……私はタカちゃんの事を思ってメシア様にお祈りしてるのよ。

タカ それは有難いんだけどさあ。

ミミ ええ。有難いでしょう。

タカ でも、メシア様のせいで俺の小遣い減っちゃったし。

ミミ タカちゃんのお小遣いが減ったのが、どうしてメシア様のせいになるのかしら？

タカ 俺、知ってんだよ。母ちゃん、メシア様に払う浄財っつーの？ あれ、毎月少しずつ金額上がってんじゃない。それに反比例して俺の小遣いが減っていったんだよね。

ミミ 馬鹿な事をおっしゃい。

タカ 馬鹿な事かよ。俺にとっちゃ死活問題だよ。ゲームに課金できないんだよ。

ミミ 前にも説明したでしょうに。メシア様に信託する金額が増える程、ポイントがもらえて、相対的幸福度指数も上がるの。もらったポイントをさらにメシア様に還元することで、幸福度元本を増やしてもいいし、他人に幸福を譲渡するのも自由なの。私の場合ね、自分がメシア様にお祈りして得られた絶対的幸福度と、信託した相対的幸福度を、全て、タカちゃんに譲渡するつもりよ。子供に譲渡する場合は、幸福相続制が導入されるから、普通に譲渡するよりも、幸福度は大きいわ。

タカ ……何言ってるのか全く分からないね、

ミミ あら。じゃあ、納得できるまで説明するわね。いずれタカちゃんにもメシア様の信仰を継いでもらわなくちゃいけないから。

タカ やだよ、やめてくれよ。

ミミ 一度この件について、じっくり話す必要があるわ。

タカ ・・・とにかく、小遣い減らすのは勘弁してくれよ。

ミミ 世の中にはね、ゲームの課金なんかより大切な事があるのよ。

タカ ゲームの課金は措いとくけど、肝心の就活ができないんだよ。小遣いくれなきゃ。

ミミ あら、そんなに就活にお金掛るの？

タカ ああ。スーツも一着じゃ足りないし、交通費も掛かるし。・・・せっかく母ちゃんが俺の為に
お祈りしても、就活できないんじゃないか？

ミミ こら！ 本末転倒なんて言葉を使っってはいけないわ！

タカ なんて？

ミミ その言葉は異教の言葉よ。取り消さなければ。

タカ 取り消す？ どうやって取り消すの？

ミミ (嬉しそうに) あら、興味あるの？

タカ (しまったという感じで) いや、ないないない。

ミミ いいわ。後で取り消し方を教えてあげる。

タカ いいってば。

ミミ 取り敢えず、先に取り消すから、母さんを見ていなさいな。

タカ ちっ。

ミミ (目をつぶって) カルヴァーナ・カルヴァーナ・カルヴァーナ。ナムアーマンダー・ナムア
マンダー・ナムアーマンダー・・・(10秒ほど沈黙)

タカ ・・・(何しとんねん、このオバハン。みたいな目で母親を見る)

ミミ さ、これで大丈夫。

タカ どうも。

ミミ さっきのお祈り方法については、また今度、じっくり教えてあげるわ。取り敢えず、今後は軽々
しく異教の言葉を使っではだめよ。

タカ わーったよ。

ミミ どうしても使わざるを得ない場合は、心の中で「カルヴァーナ」って唱えときなさい。そうす
れば、一応は大丈夫だから。

と、玄関でドアが空く音。

コウがリビングに入ってくる。

バスの運転手の姿。

ミミ お帰りなさい、あなた。

コウ たいだいま、ミミ。

タカ お帰り、父ちゃん。

コウ タカ、たいだいま。

ミミ 早かったわね。

コウ ああ。(テーブルの料理を見て) 今日、ずいぶん豪華だね。

ミミ ええ。タカちゃんの就職活動再開祝いよ。
コウ そうかそうか。ようやく、今日面接に行ったんだな。
タカ まあね。

コウ 焦らずに、自分のペースで始めればいいさ。
タカ うん。まあボチボチ。

ミミ あなたも食べるでしょう？

コウ ああ、もちろん。

ミミ すぐ用意するわ。

コウ ありがとう。

コウ、上手の祈りの空間へ行き、天を見上げて祈る。

その間、ミミはコウの食事の用意をする。

コウ アテベーブ・オブリガード・ウパニジャッターナ。アテベーブ・オブリガード・ウパニジャッターナ。東のメシア様、西のメシア様、本日も一日、無事、事故も無く仕事を終えられました。感謝致します。明日も一日、どうか我と我が家族をお守り給え。アテベーブ。(10秒ほど沈黙)

コウ、祈りを終わると部屋着に着替える為、そのまま洗面所の方へ行く。

ミミとタカは、そのまま食事続ける。

タカ ごちそうさん(立ち上がる)

ミミ あら、パンはもういいの？

タカ 腹いっぱい。

ミミ もう少し、ここにいなさい。せっかくお父さん帰ってきたのに。

タカ やだよ。

ミミ お父さんに報告しなきゃ。

タカ 何を報告すんのさ？

ミミ 今日の事よ。

タカ 面接落ちたってこと？

ミミ それもあるけど。

タカ 母ちゃんから言っといてくれよ。

ミミ ミラクル頂いたでしょう？

タカ ミラクル？

ミミ もう、タカちゃんったら。自分の事なのに。

タカ なんだよ？ミラクルって？

ミミ 私がお祈りしたから、タカちゃん詐欺会社に就職せずに済んだでしょう。これがミラクルよ。

タカ 何がミラクルだよ。俺はあの会社に入りたかったんだから。給料良かったし。

ミミ 何を言うの。タカちゃんみたいに引き籠りでメンタル弱くて鈍臭い男が、たとえ受かったとし

ても、そんな詐欺会社続くわけがないでしょう。どうせ、またすぐに精神病んで辞めちゃうわよ。しかも、辞める時、私に「会社に電話してくれ」って頼むのが目に見えてるわ。情けない。タカ・・・母ちゃん、言い過ぎだよ。

タカ タカちゃんは、小学生の頃から変わってないわ。スイミングの先生が怖いからって仮病使ってたんだ。初めてのアルバイトも3日目で嫌になって無断で飛んじやって私がお給料取りに行ったり。絵に描いたような社会不適合者じゃないの。

タカ 母ちゃん、ひどいよ。俺の過去の黒歴史、蒸し返すなよ。
タカ 何が過去よ。現在進行形で引き籠ってるじゃないの。

タカ 母ちゃんが俺を甘やかし過ぎたからいけないんだよ。母ちゃんの育て方が間違ってたんだ。タカ・・・とにかく、詐欺の片棒担がなくて済んだんだから、西のメシア様に感謝しなくちゃ。

タカ 分かった、分かった、分かったよ、感謝するよ。東西南北のメシア様に感謝するよ。

タカ 南北にメシア様はいないわ。東西だけ。
タカ はいはい。

と、コウが部屋着に着替えて戻ってくる。
そのままテーブルの席に付く。

コウ どちら。

タカ (タカに) ほら、お父さんに報告。

コウ どうした?

タカ 父ちゃん、俺、今日やっとこさ面接行っただけど、多分、落ちちゃった。

コウ そうかそうか。まあ、あまり落ち込むんじゃないよ。気長にやればいいさ。

タカ (タカに) そこは重要じゃないでしょう。

タカ ええと、

タカ お祈りの成果の事を言わなきゃ。

タカ ああ。ええと、俺の面接中に母ちゃんがメシア様にお祈りしてくれてたんだ。

コウ ほう。(タカに) 君らしいね。

タカ 当り前ですわ。タカちゃんの人生が掛ってるんだもの。

コウ 実は、私も祈っていたんだ。運転中に。

タカ そうなのね・・・運転中にどうやってお祈りしたの?

コウ ちようど渋滞に巻き込まれたからね。運転席でブレーキ踏んだまま、祈ったんだ。後ろの乗客や隣にいたガイドの子には少し変な目で見られたけど。

タカ あなたも、よっぽどタカちゃんの事が心配だったのね。

コウ ああ。我が子だからね。一瞬、間違えたけど、すぐに訂正したよ。

タカ 何を間違えたの?

コウ 西のメシア様に祈ってしまったんだよ。でも、すぐに気付いて、ちゃんと東のメシア様に祈り返したから、良かったけど。西は悪を司る方のメシア様だからね。タカの面接は東のメシア様に祈るべきだったんだ。なんだって、就職活動っていうのは善の行為なんだから。

タカ ふふ、それがね、結果的に西のメシア様で正解だったのよ。ねえ、タカちゃん。

タカ あ、ああ。

コウ うん？ どういうことだい？

ミミ タカちゃん。お父さんに説明してあげなさいな。

タカ ええと、・・・何を？

ミミ タカちゃんが受けた会社は、どんな会社だったんだい？

タカ ああ、ええと、けっこう給料の良い不動産会社だった。

ミミ そうじゃないでしょう。

タカ そうだよ。給料は本当に良かったんだ。

コウ 不動産会社は、営業の花形だね。

ミミ あなた、違うのよ。

コウ 違う？

ミミ タカちゃんが今日受けた会社ね、詐欺会社だったのよ。

コウ なんだって。そりゃ、いけないね。人を欺くのは最低な行為だ。そんな会社に就職でもしてみ

ろ。きっと、メシア様から罰を与えられる。末代までの恥だ。

ミミ でしょう。それがどうでしょう。タカちゃん、「面接官に向って」お宅の会社はどうも詐欺会社

みたいですね」って言ったらしいの。

コウ ほう。それは本当かい？

ミミ (タカに) 本当でしょう？

タカ ああ、本当だよ。

コウ (タカに) お前は、なんて立派なんだ。

ミミ ね。この気の弱いタカちゃんがよ。悪に向って正々堂々と物申したのよ。

タカ 言った事を激しく後悔してるよ。せっかく書類審査通ったのに、棒に振っちゃった。

コウ タカ、我が息子よ。

タカ なんだよ、父ちゃん。

コウ 私はお前の勇気ある行動を埃に思うぞ。

タカ やめてくれよ、父ちゃん。

ミミ 悪を司る西のメシア様にお祈りしてよかったわ。西のメシア様がタカちゃんに勇気を与えてく

れたんだわ。

コウ そういう事だね。

タカ・・・じゃ、ご馳走さん。

タカ、食事を終えて自分の部屋へ行こうとする。

ミミ、呼び止めて、

ミミ 明日の予定は？

タカ 特にないよ。

ミミ (コウに) あなたも明日は仕事休みでしょう？

コウ ああ。明日は休みだ。

ミミ 明日は、ルナが帰ってくるのよ。

コウ ほう。連絡があったのか？

ミミ ええ。だから、明日は家族4人で「幸せの家」に行きましょう。

コウ ああ。是非行こう。

タカ 俺、やだよ。

ミミ 何言ってるの。明日は首都圏支部から大尊師がいらっしゃるのよ。生の説法が聞けるのよ。

タカ 誰だよ？ 大尊師って。

ミミ 天界にいらっしゃるメシア様と唯一、コミュニケーションできる人間よ。

タカ 俺、明日忙しいんだよ。

ミミ 予定無いつて言ったでしょう。

タカ 履歴書、書かなきゃいけないーから。

ミミ 履歴書なんて、すぐ書けるでしょうに。てかタカちゃん、どうせ職歴無いんだし、履歴書なんて書くことないじゃない。

タカ うるせーよ。

コウ ミミ。

ミミ なあに？

コウ 無理強いは良くないよ。

ミミ 無理強いだなんて。あなたからも説得してくださいと。こんなチャンスはめったに無いんだから。家族揃って幸せの家に参詣するなんて。

コウ (タカに) 父さん、お前の事は信頼している。

タカ ありがとうよ、父ちゃん。

コウ だから明日、行きたくなったら私たちについてきなさい。

タカ あいあい、行けたら行くよ。じゃ、ご馳走さん。

タカ、2階の自分の部屋へ。

ミミ ……どうしてあの子は、あんなに信仰心の薄い子に育ってしまったのかしら？ 私達の子なのに。

コウ 今はまだ、心配しなくてもいいさ。

ミミ コウさん。

コウ 何だい？ ミミ。私の可愛い妻。

ミミ あなたは、少し悠長すぎるわ。

コウ そうかな？

ミミ ええ。悠長過ぎるわ。もう少し危機感を持ってもらわないと。

コウ でも、タカは私達の息子じゃないか。きっと、メシア様の教えを引き継いでくれるさ。

ミミ それは、そうだと思うけど、

コウ きっと、そうだよ。…今までずっと引きこもっていたんだ。それが、最近ようやく就職活動を始めて、…大きな進歩じゃないか。まずは、普通の会社に就職して、そこで恋人を作って、結婚して、それから、私たちに続いてメシア様の教えを引き継いでくれればいいだろう。…少し、時間は掛るかもしれないけど、焦ってはいけないよ。

ミミ ……クローガーさん、今月だけで3人も知り合いを入信させたのよ。
コウ ほう。大したものだね。

ミミ 大尊師もご満悦だったわ。

コウ そりゃ、そうだろう。

ミミ ミウラ氏の息子さんも、この前、メシア様の教えを相続したわ。

コウ あの、タロー君か？

ミミ ええ。ミウラ・タロー君。

コウ タロー君、何歳だっけ？

ミミ 20歳よ。タカちゃんより4つも若いわ。

コウ そうなのか。…立派だね、ミウラ氏も。

ミミ 会の若返りに貢献されてるわ。

コウ 将来が期待できるね。

ミミ ええ。タロー君、とても頭が良いから、将来は会の運営も任せられるでしょうね。

コウ いや、あの子ならきつと任されるだろう。

ミミ ええ。ええ。私もそう思うわ。タロー君ならきつと任されるって。大尊師もタロー君に期待してらっしゃるわ。

コウ ……会が発展するのは良い事だ。…喜ばなきや。

ミミ ……それでミウラ氏だけど、西海岸地区の支部長に就任されるらしいわ。

コウ そりゃ、当然だよ。ミウラ氏の功績を考えたら。……なんたって、タロー君を相続させたんだから。

ミミ ……それに比べてウチはどうだろう。

コウ ミミ…。

ミミ 私、少し肩身が狭くって…。

コウ ……ウチはウチ。ヨソはヨソじゃないか。

ミミ ええ、……そうね。……ごめんなさい。

コウ いや、……私の責任だ。すまない。

ミミ ……誰もあなたが悪いなんて言っていないわ。……よしてください。

コウ ……ああ。

やや気まずい間。

ミミ コウさん。

コウ なんだい？

ミミ ……ワインがあるの。飲まない？

コウ あ、ああ。ありがとう。頂くよ。

ミミ、ワインのコルクを開け、グラスに注ぐ。

コウ ……買ってきたのかい？ そのワイン。

ミミ いいえ。頂いたの。

コウ へえ。・・・誰から？

ミミ 名前、忘れちゃったわ。

コウ はは、なんだそりゃ。(飲む)

ミミ 美味しい？

コウ ああ。多分、美味しいと思う。

ミミ 思うって、・・・味の事よ。

コウ ああ。

ミミ 美味しいか不味いかしか、ないでしょうに。

コウ 酒の味は、よく分からないんだ。・・・知ってるだろう？

ミミ ええ。知ってるわ。

コウ (笑って) なら、何故？

ミミ (笑って) 何故？なにが何故？

コウ (笑って) 私が酒の味、分からないのに何故ワインなんて出したんだ？

ミミ 何故でしょうね？でも、何故飲んだの？お酒の味、分からないって自分で分かっているのに。

コウ ・・・・何故だろう。今だったら味が分かるかと思ったのかもしれない。

ミミ 多分、私もよ。今だったら、コウさん、ワインの味が分かるかもしれないと思って出したの。

コウ ・・・・ふふ。思い出すね。

ミミ 何を？

コウ 君と出会った頃。

ミミ お見合いの時？

コウ ああ。

ミミ 当時の西海岸地区の副支部長さんにセッティングしてもらった。

コウ うん。

ミミ そういえば、あの時もコウさん、福祉部長さんにワイン勧められて飲んでたわね。

コウ ああ。・・・それで、・・・そうだ、思い出したぞ。さっきと全く同じような事を言ったんだ。

副支部長さんに、ワインの味を聞かれて「多分、美味しいと思う」って。

ミミ ええ。そうだったわ。その時私、コウさんって正直な人だなって思ったの。

コウ そうなんだ。

ミミ ええ。

コウ 酒はね、・・・味は分からないけど、飲むと緊張がほぐれるんだ。気持ちが大きくなって。・・・

私は、人前に立つと緊張するからね。・・・でも、いつまでも酒に頼ってちゃいけない。そう

思っ、なるべく酒は飲まないようにしていたんだ。

ミミ たまには、息抜きも必要よ。

コウ ああ。・・・まあ、でも「酒は控えるように」って「信仰の手引き」にも書いてなかったっけ？

ミミ 改定されたのよ。

コウ そうだっけか。

ミミ 元々は、「飲酒は悪の感情を助長させるから禁ズ」だったけど。

コウ ああ、そうだ。それがいつしか、緩和されたんだ。

ミミ 私たちがお見合いした頃に「飲酒は特別な日を除き控えるべき」に変わったわ。
コウ そうそう。私達がお見合いした年に改定されたんだ。・・・だから、副支部長さんも私にワインを勧めてくれたんだ。

ミミ 今では、「飲酒は国の法律に準ずる」になってるわ。つまり信者でも18歳以上なら飲めるの。
コウ そうだったんだ。知らなかったな。・・・いつからだい？

ミミ 5年くらい前よ。
コウ そうか。・・・そこまで緩和されてたのか。

ミミ 「信仰の手引き」だって、時代に合わせて柔軟に変化しているのよ。・・・今どきお酒も飲めないんじゃない人たちが入って来ないからってことなのかしらね。

コウ しかし、驚いたね。随分と緩くなったもんだ。
ミミ あなたも「信仰の手引き」はきちんと読まないと。

コウ いやあ、中々目を通す機会がないからね。・・・
ミミ ・・・そのワイン、余計だったかしら。

コウ とんでもない。美味しいよ。
ミミ あら、分かるの？ 味。

コウ いや、・・・はは、分からない。
ミミ そのワインね、クローガーさんの知り合いの方に頂いたの。

コウ そうなんだ。
ミミ クローガーさんが、入信させた3人の内の1人よ。実家がワイナリーなんだって。
コウ へえ。

ミミ 昨日、幸せの家に行ったらクローガーさんと一緒にいらっしやって。挨拶したんだけど、名前
は忘れちゃった。

コウ 明日は、いらっしやるかな？
ミミ そりゃ、来られるでしょう。だって明日は、新しい信者の戴冠式ですもの。クローガーさんが

入信させた3人もタロー君も、大尊師から直接、冠を授与されるわ。
コウ なんてこった。・・・じゃあ、私からも挨拶しよう。

ミミ ええ。
コウ ・・・ルナは、どうする？

ミミ あの子は、明日の朝、ここに来るわ。それから、あなたの車で一緒に行きましょう。幸せの家
に。

コウ ・・・奴も一緒に来るのか？
ミミ まさか。来るわけないでしょう。

コウ そうだな。
ミミ 明日は家族4人で行くのよ。

コウ ああ。
ミミ 一人、5千は用意しなくちゃ。

コウ ・・・2万か。
ミミ 安いもんよ。
コウ いや、安いとか高いとかの問題じゃないだろう。・・・こういうのは、その、気持ちなんだか

ら。

ミミ …… そうね。 …… ごめんなさい。

コウ いや、謝らなくても。 …… ごめん。

ミミ …… 確かに、あなたの言うとおりだわ。金額の問題じゃないもの。

コウ 君を批判してるわけじゃないんだ。 …… ごめんよ。

ミミ 分かっているわ。 …… でも、 …… いや、 …… なんでもない。

コウ ミミ、何か悩んでるなら言ってくれよ。 …… 私は、君の夫なんだから。

ミミ …… 私、やっぱり悔しいわ。

コウ 悔しい？

ミミ ええ。悔しい。 …… 分かっているの。人と比べて自分達はどうかだろうって考えるのが、卑しい事だって。 …… でも、ダメね。 …… どうしても考えてしまうわ。 …… 私もまだまだ、修行が足りないわ。 …… 西のメシア様にお祈りしなくちゃ。 …… 他人に嫉妬する気持ちを鎮めて貰わなくちゃ。

コウ …… ミミ、

ミミ タロー君は立派ね。 …… タカちゃんも見習って欲しいわ。

コウ (もう一回) ミミ、

ミミ …… 私達が会に貢献できるのは、お金だけですもの。だから、少しでも多くって、

コウ (もう一回) ミミ！

ミミ …… なんてね。 …… ごめんなさい。忘れて頂戴。

コウ いや、 …… すまない。

やや気まずい間。

コウ …… (意を決した感じで) 明日、大尊師の説法があるだろ。

ミミ ええ。 …… そうね。あるわ。

コウ 前説に立候補するよ。

ミミ …… あなたが？

コウ ああ。 …… そうすりゃ、少しくらいは会に貢献できるだろう。

ミミ でも、 …… 何を話すの？

コウ 今日の事さ。

ミミ 今日の事？

コウ ああ。 …… 西のメシア様のお陰で、タカが詐欺会社に就職せずに済んだだろう。 …… その事をミラクル談として話そうと思う。

ミミ …… ええ。

コウ …… どうだろうか？

ミミ …… ミタクル談としては、少し弱いわね。

コウ そうかな。

ミミ でも、 …… でも大丈夫よ。話の持って行き方で、きっとすごいミラクル談になると思うわ。コウ うん。 …… 誠心誠意話せば、きっと皆を引き付けるミラクル談になるよ。 …… いや、やって

みせるよ、私が。
ミミ コウさん・・・、
コウ 私に任せてくれ。

少し、間。

ミミ・・・ねえ、

コウ うん？

ミミ ちょっとやってみましょうよ。

コウ 何を？

ミミ 何をもって、ミラクル談の前説に決ってるでしょう。

コウ えっ？

ミミ ぶっつけ本番だと、コウさん緊張するでしょ？

コウ あ、ああ。だけど、・・・どこかい？

ミミ ロープレだと思って。

コウ ロープレ・・・

ミミ リハーサルでもいいけど、

コウ リハーサル・・・

ミミ さ、早く。

ミミ、コウを立たせる。

ミミ まずは、あなたの話したいように話してごらんなさい。

コウ あ、ああ。

ミミ あちらから、出てきて。実際の前説ように。

コウ、一度、下手の玄関へはける。

ミミ 準備はいい？

コウ あ、ああ。

ミミ じゃあいくわね。さん、はい。(パチン、と手を叩く)

コウ、下手から中央まで歩き、中央で立ち止る。

コウ (観客に語る感じで) ええ、どうも、こんにちは。コウ・アイザックです。

ミミ (遮って) だめよ、あなた。皆に話しかける前に、メシア様の肖像に一礼しなくちゃ。

コウ そんな所からも再現するのかい？

ミミ 当り前でしょう。基本的に忠実にしなくちゃ。

コウ 分かった。

ミミ 止めちゃってごめんなさい。

コウ いや、大丈夫。

ミミ もう一度、最初からやってもらんなさい。

コウ はい。

コウ、もう一度下手へ。

ミミ じゃあ、もう一度。さん、はい。(パチン、と手を叩く)

コウ、下手から中央まで歩き、中央で立ち止まる。

背後にある体の肖像に向って一礼し、再び観客に語る感じで、

コウ えー、どうも。コウ・アイザックです。僭越ながら、大尊師の説法の前説をさせて頂きます。実は、先日、私の息子がですね、えー、就職の面接に行きまして、結果は受からなかったのですが、でも、結果的にですね、受からなくてよかったのです。その、息子が受けた会社は詐欺会社だったので。それで、だから、あの、面接に行って、受からなくて残念なはずが、受かったら詐欺会社で働くことになるから、受からなくて良かったなど。・・・ええ、あの、・・・ですから、ですからね、その、息子が詐欺師にならずに済みました、ってことです。西のメシア様に祈ったお陰です。・・・これが、あの、先日、私達がメシア様に頂いたミラクルのミラクル談です。ご清聴ありがとうございます。(一礼する)

暫し、気まずい間。

コウ (沈黙に耐えかねて) えっと、どうかな？

ミミ ・・・あなた、今の話、自分でどう思う？

コウ いや、・・・急だったから緊張しちゃって。・・・正直、ダメだったね。

ミミ ええ。グダグダね。

コウ ・・・どこが、ダメだったかな？

ミミ ・・・全部ダメだけど、でも、一番の問題は短すぎるわ。前説なんだから、最低5分は喋らないと。

コウ 最低5分か・・・。

ミミ 今のだと、どんなにゆっくり話しても1分で終わるわ。それに、これは話し方の問題だけど、全体的にとっても、まどろっこしかった。

コウ (少し、拗ねて) そりゃ、自分でも途中で気付いたさ。

ミミ だいたい何よ、「結果は受からなかったのですが、結果的に受からなくてよかったのです」って。言い回しがおかし過ぎるでしょう。無駄な重複が多い割に、内容は薄っぺらいし。時系列も無茶苦茶よ。

コウ いやあ、難しいな・・・。

ミミ ・・・まあ、リハーサルしといてよかったわ。明日、ぶっつけ本番で今の感じをやられたと思

うと、ゾツとするわ。

コウ・・・じゃあ、そろそろ風呂入って寝るよ。明日に備えて。

ミミ 馬鹿おつしやい。きちんと形になるまで練習するわよ。

コウ え？

ミミ え、じゃないわよ。ほら、もう一回。

コウ わ、分かったよ。

と、コウ、下手へ行こうとするが、ミミが呼び止める。

ミミ 登壇からやる必要ないわ。時間がないからメシア様の一礼も割愛して。

コウ あ、ああ。

ミミ じゃあ、もう一度。さん、はい。

コウ あ、ちよつと、ちよつと待って。

ミミ 何？

コウ ちよつと、深呼吸するよ。

ミミ 大丈夫？

コウ ああ。・・・すまない。(深呼吸する)・・・OK。キュー、頼む。

ミミ いくわよ、・・・さん、はい。

コウ・・・(落ち着いた感じで) 皆さん、こんにちば。コウ・アイザックです。えー、僭越ながら大尊師の説法の前に、一つ、先日、私の家族が体験したミラクル談を皆さまにご紹介したいと思えます。えー、私には息子と娘がいるのですが、先日のミラクルは、息子に起こりました。息子は今、就職活動中なのですが、先日、ある会社の面接に行きました。不動産会社です。私も妻のミミも、もちろん息子本人も、早く就職が決まって欲しいと思っておりました。そんな中、ようやく面接の機会を設けてくれた会社が、この不動産会社だったのです。(咳払い) ええ。それで、私の妻は、息子の面接中にメシア様にお祈りしました。とても熱心にお祈りしました。・・・しかし結果は、・・・残念ながら落ちました。不合格だったのです。不合格の結果を聞いた私と妻は、当然、落ち込みました。しかし、すぐに気持ちを切り替えて、「また次があるさ」と、息子を励ましました。しかし、息子の口から驚愕の真実を聞かされました。それは、・・・なんと、息子が受けた会社は詐欺会社だったのです。もしも、・・・もしも、息子が面接に合格していれば、息子は詐欺師になる所だったのです。皆さまもご存知の通り、メシア様の教えに於いて、詐欺は五大罪悪のうちの一つです。我が息子は、寸での所で罪悪人になるのを免れたのです。面接に落ちて良かったのです。それもこれも、日々、メシア様にお祈りしていたお陰なのです。メシア様はいつも我ら信者と、その家族を見守っておられるのです。日々、真面目にお祈りしている者は、自分たちが知らずに罪人になってしまいう前に、メシア様に救って頂けるのです。正しい道に導いて下さるのです。皆さまも、日々の信仰をどうか大切にしてください。・・・それでは、お後が宜しいよう(一礼する)

ミミ・・・終わり？

コウ うん。・・・どうだったかな？

ミミ 最初よりはだいぶ良くなったわね。

コウ ああ、自分でも分かるよ。最初よりはだいぶ良くなったって。

ミミ やればできるじゃないの、コウさん。

コウ ありがとう。

ミミ ただ、・・・最後の「お後が宜しいようで」って何？

コウ あれは、話の最後に付ける定型句みたいなものさ。

ミミ そう。だけど、言わないでおきましょう。

コウ えっ、どうして？ ますいかな？

ミミ この後の大尊師の説法を茶化してる感じが出てしまうわ。

コウ そうかな？ 私は良いと思うけど。

ミミ 良くないわ。何よ、「お後が宜しいようで」って。完全に馬鹿にしてるじゃないの。

コウ そんな積もりは毛頭なかったんだがね。

ミミ 兎に角、そのフレーズは言わない方がいいわ。少なからず、不快に思う人もいると思うの。

コウ 分かった。・・・言わないでおくよ。

ミミ あと、やっぱり何か少し物足りないわ。

コウ 物足りなかった？

ミミ ええ。何だか物足りない。(少し考えて)・・・そうだ、あなたのミラクル談、肝心の所が抜けているわ。

コウ 何？

ミミ まず、タカちゃんが面接官に向って「あなたの会社は詐欺会社だ」って告発したところが抜けていたわ。この部分、かなり重要だと思うの。気の弱いタカちゃんが、面と向かって言ったんだもの。

コウ ああ、そうだね。

ミミ それから、敢えてばやかしたんだと思うけど、私が最初にお祈りしたのは東のメシア様よ。だって、その時点ではまだ、詐欺会社ってことは知らなかったんだから。

コウ でも、そこは別にいいだろう。

ミミ ええ、私が家でお祈りしたのが、西か東かは、とくに言及する必要はないわね。・・・だから、そこは簡単に、「妻は息子の面接中に家でメシア様にお祈りした」で間違いないわ。

コウ だろう。

ミミ でも、あなたがバスの運転中にお祈りしたことも付け加えた方がいいわね。

コウ ああ、それも言った方がいいかな？

ミミ ええ、絶対言った方がいいわ。そこはストレートに西のメシア様に祈った事にしましょう。

コウ でも、アレだよ。途中で気付いて東のメシア様に祈り直したんだよ、私は。

ミミ そこは、敢えて言わないでおくの。

コウ そうなのかい？

ミミ そうよ。

コウ でも、おかしいよ。だって、そうだろう。私だって、その時点ではタカの受けた会社が詐欺会社だってことは知らなかったんだよ。普通に就職が決まればいいと思って、東のメシア様にお祈りしたんだ。

ミミ なんだか嫌な予感がしたから、本来、東のメシア様に祈らなきゃいけないのを、西のメシア様

コウ に変えたって言えばいいわ。予感とか偶然は、ミラクル談と相性が良いですからね。

ミミ そういうものよ。

コウ あ、じゃあ、これも付け加えて良いかな？

ミミ 何？

コウ 私がバスの中で祈ったら、渋滞が解消されたことも。

ミミ 余計な事は言わなくていいわ。

コウ はい。

ミミ でも、あれよ。あなたが周りの目を気にせずバスの運転席で祈った事は、結構良いポイントかもしれないわ。

コウ 実際、後の客と横のガイドに変な目で見られたからね。

ミミ 人目を気にせずメシア様にお祈りしたのは、とても好感が持てるわ。

コウ 分かった。そこは、付け加えるよ。

ミミ だいぶ固まってきたわね。

コウ うん。

ミミ じゃあ、もう一回やりましょうか。

コウ ああ。私も気分が乗ってきたよ。

コウ、スタンバイ。

ミミ では、テイク3。さん、はい。

コウ えー、皆さん、こんにちは。コウ・アイザックです。僭越ながら、大尊師の説法の前に、先日、私達家族が体験したミラクルをご紹介します。私には息子と娘がいます。今回のミラクルは、息子に起こりました。息子は、今、就職活動中です。・・・息子は、昔から少し引込み思案といいますが、人の輪に入っていけない所がありまして、・・・高校を卒業した辺りから、ずっと家に引き籠り気味でした。そんな息子ですが、最近、心を入れ替えたのか、働く気になり、就職活動を始めたのです。私達夫婦は喜びました。先日、初めて息子は、書類審査に通ったある会社の面接へ出かけました。息子が面接中、妻のミミはメシア様にお祈り致しました。息子が、面接に通るようにメシア様にお祈りしたのです。親として当然の行為です。同刻、私は勤務中でした。私はバスの運転手をしております。私も、息子の面接を気に掛けておりました。ちょうど、バスが渋滞に捕まりました。5分経っても、ちっとも進みません。私は、チャンスだと思いました。乗客や同僚のガイドがいるにも関わらず、運転席に座ったまま、私も妻と同じく、息子の為にお祈りをしました。・・・本来、合格祈願というのは、善の行為でありますので、セオリーですと、東のメシア様にお祈りすべきだったのですが、どういう訳か、ある予感が致しまして、私はその時、西のメシア様にお祈り致しました。仕事が終り、家に帰りました。息子に面接の結果を聞きました。結果は、不合格でした。何がまずかったのかを息子に尋ねますと、息子は、面接官に向かって「あなたの会社は詐欺会社です」と、言ったそうです。・・・そうなのです。息子が受けた会社は詐欺会社だったのです。息子に悪事を指摘された会社は、息子を面接で落としました。しかし私は、これはメシア様の計らいだったと思う

のです。もしも、もしも息子が、面接で無難な受け答えをし、この会社に合格してしまつては、息子は詐欺師の片棒を担ぐことになったからです。詐欺は、メシア様の教えによりますと、五大罪悪の内の一つです。危うく、息子は罪悪人になる所だったのです。普段、気の弱い息子ではありますが、悪を司る西のメシア様が息子に勇気を与えてくださり、息子は正々堂々と悪に対峙し、自分の信念を貫くことができたのです。・・・東のメシア様は、我ら凡夫の善を司つておられます。我々が善行を行えば行く程、幸福へ導いて下さります。西のメシア様は我ら凡夫の悪を司つておられます。我々が間違つた道に進みそうになった時、ストツパーになつてくださります。皆様もどうか、日々の信仰を大切にしてください。・・・以上を持ちまして、私どもが体験したミラクル談とさせて頂きます。ご清聴ありがとうございます。

やや間。

コウ・・・どうだ、完璧だろう？

ミミ・・・(少し考えて)ストツパーって何よ？

コウいや、西のメシア様は私たちが悪の道に進むのを防いでくださるから。

ミミでも、ストツパーって・・・もう少しマシな表現ないかしら？

コウストツパー、ダメ？

ミミええ。俗っぽくてメシア様の値打ちが下がるわ。

コウ・・・分かった、別の言い方にするよ。

ミミいや、無理に言い換えなくてもいいわ。

コウそうかな。

ミミええ。「西のメシア様は、我々が悪の道に進むのを防いでくださります」で充分よ。

コウなるほど・・・どうも私は、難しく考え過ぎて変な言い回しになってしまうね・・・反省するよ。

ミミでも、ストツパー以外は完璧よ・・・申し分ないわ。

コウ本当かい？

ミミええ。コウさん、自信を持って。今のミラクル談を明日すれば、きっと大尊師も喜ばれるわ。

コウああ・・・きっと喜ばれるだろう。

ミミ明日が楽しみだわ。

コウうん。

ミミ今の内容、文字に起こしてあげる。

コウ助かるよ。

ミミ本番は、それを読みながらやればいいわ。

コウうん。

ミミ・・・食事の途中だったわね。

コウああ、本当だ。

ミミ食べましょう。せっかく作ったんだから。

コウうん。

ミミ私にもワインをついでちょうだい。

コウ 飲むのかい？
ミミ ええ。飲みたいわ。

コウ、ミミにワインを注ぐ。

ミミ 乾杯しましょう。

コウ 何に？

ミミ 明日、家族そろって幸せの家に参詣できることに。

コウ・・・乾杯。

二人、グラスを交わす。

暗転。

②

翌日の朝。早朝5時くらい。

同じ場所。テーブルの席にルナが座っている。

ルナはノートを読んでいる。昨日、ミミが清書した前説のメモである。と、部屋着姿のタカが2階から降りてくる。

しかし、ルナは集中しているのか、タカに気付かない。

やがて、ルナは上手に行きお祈りを始める。

ルナ アテベーベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。アテベーベ・オブリガード・ウパニジャッ

ターナ。東のメシア様。西のメシア様。ただいま、両親の家に帰ってまいりました。父と母は、まだ眠っています。・・・親不孝を許したまえ。・・・(10秒ほど沈黙)

タカ (後ろから) わっ！

ルナ きゃっ！

タカ ルナ、久しぶり。

ルナ 兄さん、おどかさないでよ！

タカ へへへ、ごめんごめん。

ルナ ・・・兄さん、意外と朝早いね。

タカ 早かないよ。今から寝るんだから。

ルナ まあ！ あきれた。相変わらずなんだから兄さん。

タカ 相変わらずなんだよね、俺。

ルナ でも、・・・あれでしょう。就職活動始めたんでしょ？

タカ うん。つっても昨日1回面接行っただけだけどね。

ルナ 凄いいじゃない。

タカ 多分、落ちたけどね。

ルナ まだまだ、これからよ。それに、受けた会社、詐欺会社だったんでしょ？

タカ ああ。てか、何で知ってるの？ 母ちゃん、何か言ってた？

ルナ (ノートを見せる) これ。

タカ 何、これ？ (受け取って読む)

ルナ 「4月7日・西海岸地区礼拝・コウさんの前説メモ」って書いてあるわ。・・・多分、パパが

今日前説するから、ママが喋る内容を清書したのね。・・・健気なパパとママ。

タカ (読み終わって) ・・・なあ。

ルナ なに？

タカ これ、何？

ルナ だから今日、幸せの家で。パパが兄さんのミラクル談喋るのよ。大尊師の前説で。

タカ なに？ 前説って。なに？ ミラクル談喋って。

ルナ ・・・兄さん、本当になにも知らないんだから。

タカ 知るもんか。

ルナ 今日、皆で幸せの家に行くでしょう。それで、戴冠式の後に大尊師の説法があるんだけど、そ

の前説で、パパがこのノートに書いてある内容喋るの。

タカ ・・・本当にこれ喋るの？ 父ちゃんが？

ルナ 多分、そうだと思うけど。・・・私、読んでとても感動したわ。・・・兄さん、すごいじゃない。

こんなミラクル頂けるなんて滅多にないことだわ。

タカ ・・・よせよ。・・・俺、すげー恥ずかしいよ。

ルナ 何が恥ずかしいのよ。ちつとも恥ずかしがることではないわ。

タカ 生き恥じゃないか。

ルナ 生き恥って、・・・とても素晴らしい事じゃないの。もっと胸を張って堂々とすればいいのよ。

タカ 生き恥だね。2重、いや、3重の意味で生き恥だね。

ルナ 3重？

ルナ

タカ ああ。まず俺が無職で引き籠ってることが第一の恥だね。
ルナ ……2番目は？
タカ それが皆の前に晒されることさ。
ルナ ……3番目は？
タカ 父ちゃんと母ちゃんが、それを奇跡だと思ってる事さ。
ルナ 全部、素晴らしいことだと思うわ。
タカ そんなことを言う妹がいるのも第四の恥だな。
ルナ 酷い。…酷いわ、兄さん。…私、せっかく、せっかく…(泣きかける)
タカ ああ、ご、ごめんよ、ルナ。
ルナ ……ううん、ごめんなさい。私、今日、皆で幸せの家に行けるのが嬉しくって、つい。…
タカ こんなに早く来ちゃったの。…兄さんも、一緒に行くでしょう？
ルナ いや、俺は今日はちよっと。
タカ どうして？何かあるの？
ルナ うん、履歴書書いたり色々。
ルナ でも、すぐよ。パパの車で行くんだから。
タカ ……うん、じゃあ行けたら行くよ。
ルナ 行けたら行くじゃなくて、絶対行かないやダメだわ。あんなミラクル頂いたんだから。
タカ うーん。
ルナ 今日はローザちゃんも来るんだから。
タカ えっ。
ルナ ローザちゃんよ。知ってるでしょう？
タカ 知らないよ、そんな人。
ルナ 嘘付き。兄さん、ローザちゃんの事好きだったくせに。
タカ なんの話だよ。
ルナ 兄さん、本当に忘れたの？ローザちゃんの事。
タカ 忘れたも何も、最初から知らないんだよ、そんな人は。
ルナ 首都圏東支部のローザちゃんよ。兄さんと同じ年の。中学の時、合宿で一緒だったじゃない。
タカ 知らないね。
ルナ 私、知ってるわよ。兄さん、ローザちゃんとあれからしばらく文通してたでしょう。
タカ してねーよ。だいたい、合宿ってなんだよ。
ルナ 全国の十代二十代の信者さんが集まって、離島の幸せの家で合宿したじゃないの。
タカ ああ、そういやそんなのに参加したっけな。父ちゃんと母ちゃんが参加しろってうるさいから。
ルナ みんなでゲームしたりディスカッションしたり楽しかったんだから。
タカ ゲームはともかく、ディスカッションなんて楽しいわけがないね。
ルナ ええ。兄さんはその時から今みたいに少し捻くれた性格だったから、みんな楽しんでるのに、兄さんだけは一人でハマってたわ。
タカ ほらみる。どうせ、みんな俺を仲間外れにするんだよ。
ルナ ええ、そうよ。兄さん、仲間外れにされてたわ。ディスカッションだけじゃなくてゲームも。
タカ どうせ、つまらないゲームだったんだ。

ルナ そんなことないわ。メシア様の教えに関するチーム対抗のクイズでとてもためになったわ。
タカ なるほどね、そりゃ俺が仲間外れになるわけだ。
ルナ そんな中、ローザちゃんだけが兄さんの事を心配して兄さんに優しく接してたのに。
タカ だから、覚えてねーの。そんな話は。
ルナ 会いたいでしょ？ ローザちゃんに。だから行きましょう。
タカ やだね。
ルナ ローザちゃんだって、兄さんに会えたら喜ぶと思うわ。
タカ ……失望するさ。俺なんかに会ったら。
ルナ あら、やっぱり覚えてるじゃない。
タカ ……ローザさんは、確かに心の綺麗な人だった。
ルナ 今でも綺麗な人よ。ううん、今の方がもっと綺麗になってるわ。
タカ だったら余計に嫌だね。
ルナ ……どうして？
タカ どうしてもだ。
ルナ そう。

やや間。

タカ ……なあ、ルナ。
ルナ なに？ 兄さん。
タカ リード君は元気？
ルナ ……ええ。元気よ。
タカ リード君は、来ないの？
ルナ リードは昨日から出張なの。
タカ そっか、出張か。
ルナ ええ。出張よ。
タカ 偉いな。俺と同じ年なのに。
ルナ うん。そうね。
タカ 俺も言ってみたいよ。「明日、出張」って。
ルナ ふふふ、兄さんには当然無理ね。
タカ (笑って) おい。
ルナ 頑張って就活しなきゃだね。
タカ うん。
ルナ でも、リードは出張じゃなくても来ないわ。
タカ そっか、
ルナ うん。
タカ 大変だね、色々。
ルナ 大変よ。色々。

と、コウが2階の寝室から降りてきた。

ルナ パパ！

コウ ルナ。おお、ルナ。我が愛しい娘。

ルナ 何だか待ちきれなくて、こんなに早く来ちゃった。

二人、ハグをする。

コウ (離れて) ちよっと、その前に。．．．朝のお祈りをしなくちゃ。

ルナ ええ、そうね。

コウ、上手の祈りの空間へ。

コウ (天を見上げ) アテベーベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。アテベーベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。東のメシア様、西のメシア様、お早うございます。本日も一日、我と我が家族をお守り給え。アテベーベ (10秒ほど沈黙)

ルナ ．．．朝、早いね。パパ。

コウ ああ。なんだか緊張してね。目が覚めちゃった。

ルナ 大丈夫よ、パパ。．．．きつと大丈夫よ。

コウ ．．．ルナ。父さん、実は今日、

ルナ 前説をするんでしょう。

コウ うん。何故分かったんだい？

ルナ (ノートを持って) これ、読んだの。ママが清書したんでしょう？

コウ ああ。そうなんだよ。．．．ちよっと、本番の前に目を通して、練習しようと思って。

ルナ 素敵な話だわ。

コウ そうだろう。．．．だから、私もちゃんと伝えなきゃって思ってね。．．．はは、責任重大だ。

ルナ 楽しみだわ。

タカ ねえ、父ちゃん。

コウ 何だい？タカ。

タカ 俺の話するの、やめてくれよ。恥ずかしいんだよ。

コウ タカ、．．．気持ちは分かるが、

タカ 気持ち分かるんなら、お願いだよ。

コウ ．．．お前は、何がそんなに嫌なんだい？

タカ 何って、全部嫌だよ。．．．だって、普通嫌だろ？

コウ タカ、

ルナ 兄さんはプライドが高いから。

タカ 入ってくるなよ。今、父ちゃんと話してるんだから。

ルナ 無職で家に引き籠ってるのをローザちゃんにバレるのが恥ずかしいのね。

タカ だから、入ってくるなって。

ルナ 気にし過ぎよ、兄さん。ローザちゃんは、そんな事で兄さんを嫌ったりしないわ。寧ろ、悪い詐欺会社の面接官に向って堂々と意見を言ったんだから、好感度上がるわ。

タカ 好感度なんて、元々ないだろ。

ルナ 兄さんの事、好きになるかもしれないわよ。ローザちゃん。

タカ 馬鹿、そんな事はどうでもいいんだ。

ルナ どうでも良くないわ。ローザちゃんに好かれたいでしょう？

タカ 黙れ、ルナ。

コウ ……タカ、私は話すよ。話さなきゃいけないんだ。

タカ ……そうかい、じゃあ俺は今日行かないよ。

コウ いや、お前が来なきゃダメじゃないか。

タカ なんでさ？

コウ お前がミラクル頂いたんだから。…その話をするのに、お前がいなけりや、その、…なんだ、辻褄が合わないよ。

タカ なんだよ、辻褄って。

コウ 整合性だよ。

タカ 世間体だろ、下らない。

ルナ 世間体を気にしてるのは兄さんじゃない。恥ずかしがってばかりで。

タカ ふん、

タカ、自分の部屋に戻ろうとする。

ルナ どこ行くの、兄さん？

タカ 寝てくる。

ルナ ちよつと、

タカ 眠いんだよ、俺。今まで起きてたから。

タカ、2階の自分の部屋へ。

ルナ もう、兄さんったら。

コウ ……全く。

ルナ パパ。

コウ ん？

ルナ 私は応援してるわ。…元氣出して。

コウ (笑って) 何を言う、私は元氣だよ。

ルナ 兄さんは放っておいて3人で行きましょう。

コウ うん。…まあ、仕方ないかもしれないね。

ルナ 本人いない方が、堂々と話せるんじゃない？

コウ それは、…関係ないさ。…いや、関係ないよ。

ルナ そう。

コウ まだ、タカが行かないって決まったわけでもないし。
ルナ あを感じだと、多分行かないと思うわ。
コウ ……まあ、そうかな。
ルナ でも、代わりに私が帰って来たんだし。
コウ そうだ。ルナが帰って来てくれたんだ。
ルナ 私だけだと不満？
コウ とんでもない。……よく、帰ってきてくれたね。
ルナ ええ。リードが昨日から出張だし、久しぶりに自由にできるの。
コウ それは何よりだ。

やや間。

コウ そうだ、食事は？
ルナ まだよ。
コウ 何か、食べなさい。(テーブルに置いてある昨日の残り物を指して) ほら、昨日、母さんがご馳走を作ってくれたんだ。タカの就活祝いで。
ルナ うん。美味しそう。

二人、テーブルの席に向かい合って座る。

コウ 昨日の残り物だけどね。
ルナ ……私の為に残しておいてくれたのね。
コウ えっ？
ルナ 違うの？
コウ いや、そうだよ。……きつとそうだ。ルナが帰って来るって知ってたから。
ルナ ……頂きます。(食べる)……美味しいわ。
コウ そうだろう。ミミの料理は美味しいんだ。
ルナ ええ。久しぶりの味。懐かしい。
コウ ああ。たくさん食べなさい。
ルナ ……ママはまだ寝てるのね。
コウ うん。昨日、遅かったから。
ルナ そう。

コウ ……今日の前説、私が緊張しちゃいけないって、夜中まで清書してくれてたからね。それに、そうだ、お前が帰ってくるから、昨日の夕食をお前が朝、食べられるようにアレンジしていたんだ。これが、だから、そういう事だよ。……その、実際、お前は昨日の母さんが作った夕食の残りを、今、このようにして食べてるんだから。そういえば、ほら、昨日と違って、少し盛り付けなんかも変わっているのさ。寝る前に手を加えた証拠だよ。……その、お前が朝、食べるようにね。だから、そう、だから、ね、ミミはお前の為に残しておいてくれたって事で間違いないんだよ。

ルナ パパ、悪い癖が出てるわ。
コウ えっ？

ルナ 簡単な事を難しく言う癖。

コウ ああ。・・・はは、本当だ。

ルナ 今日の前説、そのノートをただ読めば大丈夫よ。

コウ うん、その積もりだが。

ルナ アドリブとか入れちゃダメよ。

コウ ・・・分かってるさ。

ルナ 自分の言葉で話そう、なんて思わなくていいからね、パパ。

コウ ・・・ルナ、誤解しないでおくれ。昨日、練習したのさ。母さんと2人で。母さんが清書して

くれたノートは、私の言葉がベースになっている。

ルナ 私、なんだか心配なの。パパ、あがり症だから。

コウ (少し怒って) 娘が親の心配なんてしなくてよろしい。

ルナ それも、そうね。・・・ごめんね、パパ。

コウ いや、いいんだ。・・・私は、実際、あがり症だから。

ルナ ううん、ごめんなさい。パパが気にしてる事、言っちゃったわ。

コウ 気にしちゃいないよ、私は。・・・自分の事はよく知ってるんだから。

ルナ ・・・でも、アレよ。今日のパパの前説が上手くいけば、パパも副支部長補佐くらいにはなれ

るんじゃないかしら？

コウ 馬鹿なことを言っではいけないよ。

ルナ 馬鹿なことじゃないわ。・・・私、パパもママも正当な評価がされてないと思ってるの。

コウ 正当な評価？

ルナ だってそうでしょう。パパもママも誰より熱心に信仰してるのに、未だに役職のないヒラの信

者だなんて。・・・私、少しおかしいと思うの。

コウ 私は役職が欲しいわけではない。

ルナ でも、

コウ そんな理由でメシア様に帰依してるわけじゃないんだ。

ルナ そりゃ、そうかもしれないけど、

コウ ルナ、これ以上言うのはよしなさい。

ルナ パパ・・・、

コウ 私はただ、家族が健康で平穩に暮らせれば、それでいいんだ。私にとって、それが一番の幸せ

なんだから。

ルナ ごめんなさい。

コウ いや、謝らなくても。

ルナ 確かにパパの言うとおりだわ。

コウ ルナ、

ルナ 出世欲とか権力欲は、メシア様も否定されてるもの。

やや気まずい間。

コウ …… 奴は、真面目に仕事しているか？
ルナ 奴？

コウ …… すまない、リード君だ。

ルナ …… ええ。仕事は真面目よ。

コウ そうか。

ルナ 毎日残業してるわ。仕事大好きなの。

コウ …… お前は毎日、リード君の食事を作っているのか？

ルナ ええ。…… 妻だから。

コウ …… そうか。

ルナ うん。当然でしょう。

コウ ああ。当然だ。

ルナ 変な。パパ。

コウ 気になってね。…… 大事な娘の事だから。

ルナ でも、嬉しいわ。そうして気にしてくれるのが。

コウ …… 例えば、例えばだよ、リード君が残業で夜遅くに帰ってきた時も、お前はリード君の食事を作るんだろ？ その、その時に、それをリード君と一緒に手伝ったり、逆にリード君が以前の食事を作ったり、なんてことはあるのか？

ルナ それは、あまりないわ。

コウ そうか、ないんだね。

ルナ たまにはあるわよ。

コウ たまに？ それは、どれくらいだ？ 週に1回とか月に1回とか。

ルナ そんなの数えてないから分からない。

コウ じゃあ、少なくとも、そういう、なんだ、週に1回とか月に1回とかってペースじゃないわけだね。定期的にお前を手伝ってるってわけではないのだね。

ルナ それは、そうだけど。

コウ でも、たまにはあるんだろう？

ルナ うん、

コウ その、たまにってのは、どういう時なんだ？

ルナ どういう時って言われても、……

コウ お前の体調が良くない時とか、精神的にまいってる時とか、そういう時か？

ルナ 分からないわ。

コウ 分からない？ じゃあ奴は、……リード君は、お前の体調が良くない時も、精神的にまいってる時も、お前が家事をするのを手伝ったことはないってことか？

ルナ 違うわ、違うわよ。

コウ 何が違う？

ルナ リードと結婚してから体調が悪くなったり精神的にまいったことが無いから分からないって言っただけよ。

コウ じゃあ、仮にお前の体調が悪くなったとして、そんな時にリード君はお前の食事を作ったり、

いや、作らないにしても、自分が食べた食器を洗ったり、後片付けをする可能性はあるのか？
ルナ あるわよ。・・・夫婦なんだから。

コウ そうか、そうか、・・・いや、・・・そこら辺の事情がどうも心配だったんだ。
ルナ ・・・・まだ怒ってるの？

コウ 私は怒ってはいないさ。

ルナ 本当？ なんだか怒っているように思うわ。

コウ そんなことはない。

ルナ ママは？ ママは、まだ怒ってる？

コウ ミミも怒っていないよ。

ルナ そう。

コウ そうだ。

ルナ パパもママも怒ってないのね。

コウ ああ。怒ってはいないよ。

ルナ 安心したわ。でも、何故かしら。二人とも怒ってないのに、なぜか私、二人に対して悪いこと
したんじゃないかなって、たまに考えて泣きたくなるの。

コウ 好きな人と結婚するのは、悪い事ではないさ。

ルナ でも、パパもママも最初は反対したわ。

コウ それは、・・・いきなりだったから。

ルナ いきなりだったから、反対したの？

コウ ああ。そうだよ。

ルナ どうして、いきなりだったら反対するの？

コウ それは、そういうものだよ。・・・どの親だって娘がいきなり結婚するってなったら、取り
敢えずは反対するものさ。

ルナ 取り敢えず？

コウ いや、・・・取りあえずってのはアレだが、・・・その時は本当に反対していたんだ。私も、ミ

ルナ ミも。心の底から真剣に反対していたよ。

ルナ そんなに反対していたのね。

コウ ああ、・・・反対していた。

ルナ そんなに反対していたのに、本当にもう怒っていないの？

コウ 怒った所で仕方がないさ。・・・現にお前は結婚してしまったのだから。

ルナ ええ、してしまったわ。

コウ うん。

ルナ ・・・・ごめんね。

コウ ・・・・今では、よかったと思ってるよ。・・・幸せそうなお前を見て、祝福しているさ。

ルナ 一度、きっちり謝りたかった。パパとママの期待に応えられなくて、ごめんねって。

コウ 私もミミも古い人間だからね、・・・一人娘が外国人と結婚すると聞いて気が動転したんだ。

ルナ ええ。パパの気持ち分かるわ。

コウ いや、分からなくていいんだ。私達の考えは古いんだから。

ルナ それだけ、パパもママも私の事を大事に思ってくれてるってことよ。

コウ・・・今の時代、国際結婚は普通だからね。・・・私の家から出るとは思わなかったが、・・・いや、よそう。普通の事なんだ。お前の結婚も、普通に反対して、時間が経って、普通に祝福する。全て、普通の事なんだ。

ルナ・・・リードは、とても素敵な人よ。

コウ ああ、分かっている。

ルナ とてもすっかりした人だわ。

コウ そうだろうね。

ルナ ちゃんと自分の考えを持っているわ。

コウ ああ。

ルナ 毎日、リードから刺激を受けてる。

コウ・・・そうだろうとも。

ルナ そうよ。

コウ・・・お前も、自分をすっかり持たないといけないよ。

ルナ・・・分かってるわ。

コウ (笑って) 本当かい？

ルナ 本当よ。リードと結婚しても、私はメシア様を信じているもの。

コウ それを聞いて安心した。

ルナ 毎晩、リードと議論してるの。

コウ 議論か・・・、

ルナ ええ。私はいつも、リードにメシア様の教えの素晴らしさを説明しているわ・・・。

コウ リード君に？

ルナ (笑って) 他にいないでしょう。・・・でも、ちっとも釣れないわ。・・・リードはメシア様なんて存在しないって思ってるんだもの。

コウ なんて奴だ。・・・(真剣に) 間違っても奴の国の教えに染まってはいけないよ。

ルナ やだわ、パパ。そんな訳ないでしょう。

コウ だが、奴の国の教えは、

ルナ (遮って) リードは無神論者よ。ご両親のことも批判しているわ。

コウ そうだったのか。

ルナ ええ。だから、そこは安心して欲しいわ。

コウ・・・そうか。

ルナ うん。

コウ・・・それはそれで、危険なんだがな。

ルナ えっ？

コウ いや、何でもない。

ルナ 変なの。

コウ すまない、忘れてくれ。

ルナ うん。

やや間。

ルナ ……ねえ、パパ。

コウ うん？

ルナ 私、実はね、

と、ミミが降りてきた。

ルナに気付いて、

ミミ ルナ、ルナちゃん！ お帰り、私の可愛いルナちゃん。

ルナ ママ、久しぶりね。帰って来たわ。

二人、ハグをする。

ミミ (離れて) ああ、ルナ。ちょっと待ってね。母さん、朝のお祈りをしなくちゃ。

ルナ ええ。もちろんよ。

ミミ、上手の祈りの空間へ。

ミミ (天を見上げて) アテベイベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。アテベイベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。東のメシア様、西のメシア様。お早うございます。今日は、アイザック家にとって特別な一日です。家族皆で幸せの家へ参詣致します。どうか本日もメシア様のご加護のあらんことを。アテベイベ……(10秒ほど沈黙)

祈り終えたミミ、テーブルの席へ。

ミミ 改めてお帰りなさい。ルナ。

ルナ ただいま……。パパとママと兄さんに会いたくて、こんなに早く着いちゃった。

ミミ 素晴らしいことだわ。

ルナ ママも朝が早いのね。

ミミ そんなことないわ、普通よ。

ルナ その服、とても似合っているわ。

ミミ ええ。せっかく皆で幸せの家に行くんだもの。お洒落もしくちや。

コウ ミミ、……昨日は遅くまで起きていたんだろう？

ミミ ええ。……コウさんの為に清書しておいたわ。そのノートよ。

ルナ ママ、私、読んだわ。

ミミ あら、そうなの。

ルナ 兄さん、とても素晴らしいミラクル頂いたのね。

ミミ そうなのよ。タカちゃん、とても素晴らしいミラクル頂いたの。

ルナ 私、楽しみだわ。パパの前説。きっと皆すごく感動すると思う。

コウ よしなさいよ、ルナ。
ミミ いいじゃない、あなた。

ルナ そうよ。私、本当に楽しみだわ。とても名誉なことだもの。

コウ 名誉って、・・・私はただ、日々の信仰の大切さを皆に伝えるだけだよ。

ルナ それが名誉なことじゃない。

ミミ ルナ、

ルナ なあに？ ママ。

ミミ あまり言い過ぎるのは良くないわ。

ルナ どうしてよ？

ミミ あまり言い過ぎると、お父さんが緊張するでしょう。コウさんはプレッシャーに弱いんだから。

ルナ ああ、そっか。

コウ おい、

ミミ 今回は確実に置きにくわよ。

コウ 置きにくって、君、

ミミ 変な冒険は無し。確実に皆と、それから大尊師を感動させなきゃ。

ルナ 大丈夫よ、ママ。

ミミ 何？

ルナ 私もさつき、パパに釘を刺しておいたわ。変なアドリブ入れずに、ただそのノートを読めばいいって。

ミミ 流石はルナちゃん。分かっているわね。

コウ お前たち、いい加減にしないか。

ミミ どうしたの？

コウ・・・私はね、そういう、なんだ、大尊師を感動させようとか、会の中で自分の地位を高めようとか、そういう不純な動機で前説に立候補したわけじゃないんだから。

ミミ でも、どうせなら沢山の人を感動させたいじゃない。それに付随してあなたが出生してくれたら儲けものだわ。

ルナ そうだわ。皆がパパの前説で感動して、「メシア様の教えはすごい」ってなったら、皆、もっと熱心にお祈りすると思うの。

ミミ そうなったら、どんなに素晴らしいかしら。

ルナ ねえ！

ミミ 副支部長補佐くらいにはなれるかもしれない。

コウ (怒って) おい、
ルナ ママだってミラクル談執筆主任とかになれるんじゃない？ それくらいすごい内容だもの、このミラクル。

ミミ 何それ？ そんなのあるの？

ルナ ローザちゃんに聞いたんだけど、首都圏東支部の婦人会で新しくできた役職らしいわ。

ミミ ああ、そうなの。

ルナ 西海岸地区にもできるんじゃないかしら。

ミミ ふふ、私が初代だったりして。

ルナ その可能性も充分あるわ！

コウ、ノートを持って立ち上がる。

ミミ どうしたの？

コウ 部屋で練習してくる。

ミミ 見てあげましょうか？

コウ いらないよ。

ミミ でも、やっぱり不安だわ。

コウ ノートを読めばいいだけなんだから。

ミミ そうだけど。

コウ 問題ないよ。．．．お前たちの言う通り、ただノートに書いたことだけを読むさ。

ミミ 本当に大丈夫ね？

コウ くだいね、君も。大丈夫だって。

コウ、2Fの寝室へ向かう。

ミミ、呼び止めて、

ミミ 今回のが上手くいったら、次からは自分の言葉で話しても大丈夫だからね。取り敢えず、今日は確実に行きましようね！

コウ、何も言わずに2Fへ退場。

ルナ ．．．パパ、怒ってる？

ミミ 大丈夫でしょ。

ルナ なんだか、機嫌悪くなかった？

ミミ けっこう気難しい所があるからね。

ルナ 変に真面目なところがあるから。

ミミ 長所でもあるんだけどね。

ルナ そうだ、ママ。

ミミ ん？

ルナ 兄さんにローザちゃんの事、言っといたよ。

ミミ ああ、有難う。ローザちゃんがいるなら、タカちゃんも今日来るでしょう。

ルナ それがね、逆効果だったわ。

ミミ 逆効果？

ルナ うん。多分だけどね、兄さん、ローザちゃんに引き籠りがバレルの嫌なんじゃないかしら。

ミミ まあ！ どうして？ 普通、嬉しいでしょう！？ 好きな子に会えるんだから。

ルナ シヤイなのよ、兄さん。

ミミ 馬鹿な子．．．。

ルナ　ねえ、ママ。兄さんって、やっぱりまだローザちゃんの事が好きなの？
ミミ　ええ。好きでしょうね。

ルナ　やっぱり。

ミミ　あなたが昔参加した合宿以来、ずっとタカちゃん、ローザちゃんに恋してるわ。
ルナ　一途ねえ、兄さん。私には最初「そんな人知らない」って言ってたけど。

ミミ　強がってるんでしょう。昔、こっそり手紙読んだけど、タカちゃんったら格好付けた事ばかり書いてたわ。

ルナ　ママ、・・・兄さんの手紙読んだの？

ミミ　ええ、こっそりね。一時期文通してたでしょう、タカちゃんとローザちゃん。

ルナ　黙って読んだんだ、・・・手紙。

ミミ　それは、だって、ルナちゃん。親として当然の権利よ。

ルナ　でも、さすがにまずいんじゃないかしら、・・・一応、プライバシーだし。

ミミ　何言ってるのよ、タカちゃんにプライバシーなんてないわ。

ルナ　そう。

ミミ　ずっと家に引き籠ってるんだから、仕方ないでしょう。親に手紙見られても。

ルナ　そういうもののね。

ミミ　でもねえ、私が最後に手紙を盗み読んだのは、もう随分と前の話よ。

ルナ　今はさすがに文通なんてやってないでしょうね。SNSあるから。

ミミ　そうなのよ。だから、もう久しくあの二人がどんなやり取りしてるのか見れてないわ。ちょっと楽しかったのに。

ルナ　ねえ、ママ。

ミミ　うん？

ルナ　兄さん、手紙にどんなこと書いてたの？

ミミ　なによ、ルナちゃん。興味あるの？

ルナ　まあ、多少は。

ミミ　プライバシーがどうか言ってたくせに。

ルナ　ねえ、教えてよ、ママ。兄さん、ローザちゃんに何書いてたの？

ミミ　あの頃は、そうね、・・・毎日部活で忙しい、みたいなこと書いてたわ。

ルナ　兄さん、部活なんてやったことないのに。

ミミ　そうなのよ。

ルナ　因みに、何の部活って書いてたの？

ミミ　フットボールですって。自分はキャプテンだって書いてたわ。

ルナ　まあ。よくそんなにヌケヌケと嘘を付けるわねえ。

ミミ　手紙なんだし、バレなきや書いたもん勝ちなんでしょう。

ルナ　恋の力だね。

ミミ　格好付け過ぎなのよ。

ルナ　それくらい好きだったのね、ローザちゃんのこと。・・・そんな付かなくてもいい嘘まで付いて。

ミミ　女の子に優しくされたのが、後にも先にも初めての経験だったんでしょね。

ルナ 正直に言う方が楽なのに。・・・ローザちゃん、そんな事で人を嫌ったりしないのに。

ミミ むしろ、些細な嘘を付く人の方が嫌でしょう。

ルナ 兄さん、ローザちゃんのこと全然分かっていないのよ。

ミミ そうね・・・。ローザちゃんはとても立派な子だわ。

ルナ うん。あんなに良い人、あまりいないよね。

ミミ 私は、タカちゃんにはローザちゃんと結婚してほしいと思っているのよ。

ルナ それは、・・・どうかな。

ミミ タカちゃんにはピツタリだと思うの。

ルナ でもローザちゃん、美人で優しいから、きっとすごくモテると思うわ。

ミミ それがどうしたの？

ルナ ・・・兄さんには高嶺の花だと思う。

ミミ ローザちゃんのお父様は首都圏東支部の支部長よ。

ルナ ええ、そうね。

ミミ とても敵しい人だわ。

ルナ らしいわね。

ミミ 結婚相手は少なくともメシア様の教えを信じてる人が条件よ。

ルナ そうなんだ。

ミミ タカちゃんにもチャンスはあるわ。

ルナ 兄さん、ちっとも真剣じゃないじゃない・・・。信仰に関しては。

ミミ それは、これからじっくり話し合うわ。

ルナ ・・・そう。

ミミ タカちゃんが、ローザちゃんと結婚してくれたら、うちも安泰だわ。

ルナ でも、・・・ライバルは多いよ。兄さんなんかより、熱心に信仰してる人、西海岸地区だけで

も沢山いるわ。

ミミ 例えば？

ルナ 例えば、・・・タロー君とか、

ミミ ・・・そうね。確かに、彼は立派だわね。

ルナ ・・・全国だと、もっと沢山いらっしやるでしょう。・・・ローザちゃんのお相手に相応しい

人材が。

ミミ ルナちゃん、

ルナ 何？

ミミ あなたは、誰の味方なのかしら？

ルナ 味方って、

ミミ タカちゃんに、幸せになってもらいたくないの？

ルナ ママ、

ミミ あなたの言う通り、確かにライバルは多いわ。

ルナ ・・・まずは、アレよ、ほら、・・・兄さんがまともな会社に就職して、それから、ねえ、別

にローザちゃんじゃなくても、一般の人とお付き合いしてくれたら、それはそれで、一つの幸

福だと思うわ。

ミミ ……死んでほしいわ。
ルナ えっ？

ミミ タロー君もミウラ氏も、世渡りが上手いだけ。

ルナ ママ、……ママ？

ミミ 信仰心は、私とコウさんが一番強いわ。

ルナ ええ、……そうね、……分かってるわ。

ミミ あなたに何が分かるの？

ルナ ママ、……分かってるわよ。一番近くで、パパとママを見てきたんだから、

ミミ あなたは、異国の男と結婚してこの家を出て行ったでしょう。

ルナ ……ごめんなさい。

ミミ なんて謝るの？ 何か悪い事をしたの？

ルナ ……やっぱりまだ怒っているのね。私がリードと結婚したことを。

ミミ 馬鹿おっしやい。娘の結婚を怒るもんですか。

ルナ ……ママ、……きつと疲れてるのね。昨日、遅くまで起きてたから。

ミミ ええ、そうよ。遅くまで起きていたの。コウさんの前説が上手くいくように、ノートを清書したり、……あなたが久しぶりに帰ってくるから、……家族皆で幸せの家に参詣できると思って、興奮して目が冴えちゃって……なかなか寝付けなかったの。

ルナ ……私、今日、幸せの家に行かない方がいいかもしれないね。

ミミ 何を言うの？ そのために、久しぶりに帰ってきたのでしょ。

ルナ 私がいたら、肩身が狭いんじゃない？

ミミ どうして？

ルナ 他の人に後ろ指差されるかもしれない。

ミミ 後ろ指？ 私が？ どうして？ 誰より熱心にメシア様を信仰してるのよ。

ルナ だから、私がリードと結婚したから。

ミミ ええ、そうね。あなたは、リードさんと結婚したわ。リードさんの国の教えはねえ、

ルナ リードは無神論者よ、

ミミ そう。立派なこと。

ルナ リードはリードで肩身が狭いのよ。……リードのご両親も兄弟もメシア様とは違う教えを信仰してらっしゃるけど、……でもリードは、「僕は神なんて非科学的なものには信じない」って頑なだから……。

ミミ あなたが、リードさんをメシア様の教えに導くといいわ。

ルナ やろうとしているわ。

ミミ ……あなたこそ、リードさんではなくて、メシア様を信仰してる男性と結婚して欲しかった。……それこそ、タロー君でもよかったわ。

ルナ ……あの人は、あまりタイプじゃないの。

ミミ そう。

ルナ ……リードと結婚しても、私はメシア様を信じてるわ。毎日毎晩、メシア様にお祈りしてるもの。リードは、そんな私をとて冷めた目で見てるわ。

ミミ なんて男でしょう。……メシア様に祈る者を否定するとは、罰が当たるわね。

ルナ ……ママは、リードに罰が当たって欲しいの？

ミミ 当たって欲しくないわ。あなたの愛する旦那様なんだから。

ルナ 私も当たって欲しくないわ。リードに罰なんて。そんな、恐ろしい事、

ミミ 当然よ。

ルナ でも、当たるんでしよう。……私の信仰が強ければ強いほど、それを否定するリードは、メシア様から罰を与えられるんでしよう？

ミミ ……考え過ぎよ。考えずに、ただお祈りしなさい。

ルナ リードは私に言うの。……それは、大いなる矛盾じゃないかって。

ミミ 何が矛盾よ。

ルナ 私は幸せになりたくて祈る。リードはそれを否定する。リードに罰が与えられる。「僕に罰が下るのが、君にとつての幸せなのか？」ってリードは私に聞くの。私、いつも答えに窮してしまふ。

ミミ 罰を与えるのはメシア様ではないわ。自然の摂理で罰が当たるようになってるの。

ルナ ……私、最近、なんだかよく分からない。自分が正しいのかどうかも分からない。

ミミ ……やはり、あなたはあの男と結婚すべきではなかったわ。

ルナ ママ……、

ミミ 殺してやりたいわ。

ルナ そんなこと、

ミミ 私の可愛い娘を苦しめて。

ルナ やめて、ママ。……普段はとても優しくて尊敬できる人なの。

ミミ ……ええ、ええ、そうね。ごめんなさいね、ルナ。忘れて頂戴。

ルナ うん。

ミミ 自分をしっかり持つことが肝心よ。

ルナ そうね、……ねえ、ママ、

ミミ 何？

ルナ リードの事なんだけど、……私ね、実は、

と、コウとタカが降りてくる。

ミミ どうしたの？

ルナ (コウとタカが降りて来たのを気にして) ううん、なんでもない。

ミミ 何よ？

ルナ ほんと、なんでもないから。

ミミ 変な子ね。……(コウに) 練習はもういいの？ 完璧？

コウ ……ああ。

コウ、一人離れた椅子に座り、ノートに書かれた文章をブツブツ小声で読み始める。

ミミ (そんなコウに) 最終チェックしましょうか？

コウ (ちらつとミミの方を向き) いらない。
タカ ……ねえ、母ちゃん。

ミミ お早う、タカちゃん。今日は朝早いわね。
タカ うん。

ミミ 偉いわ。一緒に幸せの家に行く気になってくれたのね。

ルナ ママ、違うわよ。兄さんは、今まで起きてたの。今から寝るらしいわ。

タカ 行くよ、今日。幸せの家に。

ルナ えっ？

ミミ 本当！？母さん、タカちゃんの事信じてたわ。

コウ、相変わらず離れた椅子に座り、ノートをブツブツと小声で読んでいるが、少し声のボリュームが上がる。

コウ ……えー、皆さん、こんにちわ。コウ・アイザックです。僭越ながら、大尊師の説法の前に、先日、私達家族が体験したミラクルをご紹介させていただきます。(咳払い)

ミミ (コウに) ねえ、あなた！タカちゃんも今日、幸せの家に一緒に行くんですって！

コウ (ノートから目を離し) ああ。そうらしいね。

ミミ 本当に一家4人で幸せの家に参詣できるなんて。夢のようだわ。ねえ、ルナちゃん！

ルナ え、ええ。そうね。

コウ (再びノートを読みながら) 私には息子と娘がいます。今回のミラクルは息子に起こりました。

息子は、今現在、就職活動をしております。

タカ 父ちゃん、だから、

コウ (無視して読み続ける) 息子は、高校を卒業した辺りから、家に引き籠るようになりました。

息子は昔から、少し引っ込み思案といましようか、集団の輪に中々馴染めない人間でした。

私達夫婦は、そんな息子を心配しており、日々、メシア様にお祈りをしておりました。

ミミ あなた、心配なら見てあげるわよ。そんな所でブツブツ喋ってないで。

コウ (ノートから目を離して) ……だから、大丈夫だよ。ただ、このノートに書いてある事を読

むだけなんだから。

ミミ でも、

コウ 邪魔しないでくれるか？一人で最終チェックしてるんだから。一言一句間違えないように。

ミミ 邪魔って、……私が清書したんでしょうに。

コウ ああ、そうだ。君が清書してくれたんだ。それを私はただ、何の感情も入れず機械になって読むんだ。その練習を今、しているんだ。一言一句、間違えないように。噛んだりしたら台無しだからね。……後、何時間かすれば本番なんだから。……(ノートに戻り) えーっと、どこまでいったかな？まあいいや、最初からやり直そう。……えー、皆さん、こんにちわ、コウ・アイザックです。僭越ながら、

ミミ あなた、ねえ、ちよっと。

コウ うるさいな、そっちの事はそっちで処理してくれよ。(小声になり) 僭越ながら、大尊師の説法の前に、先日、

タカ (ぼそっと) 父ちゃん、やめてくれよ。

コウ (無視して、小声で) 私達家族が体験したミラクルをご紹介させて頂きます。(咳払い) 私には息子と娘がいます。今回のミラクルは、

タカ 父ちゃん、やめてくれったら！

コウ (ので声のボリュームを上げる) 今回のミラクルは息子に起こりました。息子は、今現在、就職活動をしています。息子は、高校を卒業した辺りから、

タカ (叫ぶように) やめてくれて言ってるだろ！

タカ、黙る。

少し異様な雰囲気。ミミとルナも、その雰囲気を感知取っている。

やがてルナが沈黙に耐えかね、

ルナ ねえ、兄さん、・・・どうしたのよ？ パパも、・・・なんだか変だわ。

タカ ・・・受かったんだよ。俺。

ルナ えっ？

タカ 母ちゃん、俺、受かったんだ。

ミミ 受かったって、タカちゃん、・・・何が？

タカ 何がって、会社だよ！ 決ってるじゃないか！ 昨日受けた会社に合格したんだ。来月の一日、初出勤なんだよ。

ミミ そ、そうなの。

タカ ああ、晴れて社会人になるんだ。出張もあるし、給料だっていいんだ。俺、すごく嬉しいんだよ。今、新しい人生の予感がしてんだよ。・・・嬉しくないのかよ？ 喜んでくれよ、ねえ、ルナ。

ルナ 本当なの？

タカ なんで俺が嘘を付くんだい？

ルナ そうね、・・・おめでとう、兄さん。

タカ 母ちゃんは？

ミミ タカちゃん、

タカ 嬉しくないのかい？ ずっと引き籠ってた俺が、ついに働くんだよ。

ミミ う、嬉しいわ。

タカ だろう？ 母ちゃんがメシア様に祈ってくれたお陰だよ。

ミミ お、おめでとう。タカちゃん。

タカ ありがとう、母ちゃん。今まで悪かったね。世話してくれて。

コウ ・・・お前は就職なんかしてはいけないよ。

タカ (ミミに) こんな事、言うんだよ。さつきから。

ミミ さつきから？

タカ 2階でさ、父ちゃんずっとそのノート読む練習しててさ、うるさいから静かにしてくれって、言いにいったら、ちよっと口論になってさ、

コウ (笑いながら) そうなんだよ、ミミ。私達は、上でちよっとした口論になったんだ。

タカ ……兎に角、俺は受かったんだよ。入りたかった会社に……父ちゃんだけだよ、祝つてくれないの。

ミミ あなた、

コウ 詐欺会社で働くのは、断じて許さない。(ミミに) そうだろう？ だって、詐欺は罪悪なことなんだから。

ミミ そ、そうね。

タカ あんなの、ただの噂だよ。実際は、至ってクリーンな会社さ。

コウ こんな時間に連絡を寄こすなんて、常識のある企業とは思えんね。

タカ 連絡来たのは昨日だよ。メールの通知、気付かなくて。さっき確認したんだ。

コウ 面接官に暴言吐いたお前を採用するなんて、とてもマトモな会社じゃないね。

タカ そこが、逆に評価されたのかもしれないね。

コウ 評価？ 馬鹿な。

タカ 破天荒な人材が欲しかったのかもね。

コウ ……とにかく、お前はまだ働かなくてもいいんだ。

タカ なんてだよ！？ おかしいよ、そんなの！

ミミ でも、タカちゃん、

タカ なんだい？ 母ちゃん、

ミミ やっぱり、もう少し考え直さない？ だって、ねえ、ルナ、

ルナ ……兄さん、本当にその会社で働きたいの？

タカ なんて、そんな事聞くんだよ？ さっきから言ってるだろ、俺は早く働きたいんだって、

ミミ でも、いきなり不動産会社の営業だなんて……ちよつとタカちゃんにはハードル高いんじゃないかしら、

タカ 努力するさ、

ミミ タカちゃん、

タカ ……今日の幸せの家、スーツで言った方がいいかな？

ミミ そ、そうね。正装の方がいいわね。

タカ ……支度してくるよ。

タカ、2階の自分の部屋へ。

残された3人、暫し沈黙。

コウ (再び、ノートを読み始める。小声で) ……息子は、高校を卒業した辺りから、家に引き籠るようになりました。息子は昔から、少し引つ込み思案といましようか、集団の輪に中々馴染めない人間でした。私達夫婦は、そんな息子を心配しており、日々、メシア様にお祈りをしておりました。

ミミ あなた、

コウ (無視して) ある日、メシア様へのお祈りが息子に通じたのでしようか、息子は心を入れ替え、就職活動を始めたのです。私達夫婦は喜びました。先日、初めて息子は、書類審査に通ったあの会社の面接へ出かけました。息子が面接中、妻のミミはメシア様にお祈り致しました。息子

が、面接に通るようにメシア様にお祈りしたのです。親として当然の行為です。同刻、私は勤務中でした。私はバスの運転手しております。私も、

ミミ あなた！

コウ (無視して) 私も、息子の面接を気に掛けておりました。ちょうど、バスが渋滞に捕まりました。5分経っても、ちつとも進みません。私は、チャンスだと思いました。乗客や同僚のガイドがいるにも関わらず、運転席に座ったまま、私も妻と同じく、息子の為にお祈りをしました。

ミミ (ノートを取り上げ)・・・やめて、・・・やめて頂戴！

コウ・・・ミミ、何をするんだい？

ミミ コウさん、・・・もういいの。

コウ 何が？ 何が、もういいのさ？

ミミ 前説は、もうしなくていいわ。

コウ 私は、したいんだよ。

ミミ でも、タカちゃん仕事決まっちゃったし、

コウ どうせすぐまた辞めるさ。

ミミ あなた、

コウ 精神の弱い子だからね、

ミミ そんなことないわ。

コウ そんな事あるさ、・・・さ、ノートを返しておくれ。まだ一度も通せてないんだから、

ミミ もう必要ないの、

コウ せっかく君が清書してくれたんだ。夜遅くまで、

ミミ・・・もう、そのノートに書いた内容は事実じゃなくなったわ。

コウ 事実だよ。

ミミ 私とコウさんのお祈りが通じて、タカちゃんの仕事が決まったの。そして今日、家族4人で幸せの家に行く。・・・これが事実よ。・・・それだけで、素晴らしい事だわ。

コウ 私に出世して欲しいんだろ？

ミミ 出世ですって？

コウ ずっと肩身が狭かったんだろ？

ミミ そんな事、

コウ 昨日、言ってたじゃないか。君は悔しかったんだ。ミウラ氏やクローガーさんに比べて、私は不甲斐ないからね。

ミミ そんな事、言っていないわよ。

コウ そうだね、言っていない。

ミミ コウさん、

コウ そんな事、君は言わなかったよ。だから、今のも私の早とちりだ。

ミミ コウさん、一体どうしたのよ？

コウ どうもしていないさ。・・・さ、早くノートを寄こすんだ。一言一句、間違えずに読みたいたんだ。大尊師や他の信者を感動させたいんだよ。

ミミ 感動ですって？

コウ ああ、感動だ。このノートに君が清書してくれたミラクル談を語るんだ。皆の前で。きっと皆

感動するぞ。なんたって、あの気の弱いタカが、詐欺会社の社長？ 面接官？ そいつに向って正々堂々、正論吐いたんだから。すごい勇氣じゃないか。君だって、私が沢山の信者を感動させたら嬉しいだろ？ 鼻が高いだろ？

ミミ ……嘘は付けないわ。

コウ 嘘？ 何が嘘だ？ 私ははっきり覚えているぞ。君は確かに大尊師や、多くの信者を感動させたって言ったぞ。ついでに私が役職持てたら猶良しって。

ミミ そうじゃなくって、

コウ そうじゃない？

ミミ ええ、そうじゃないわ。

コウ そうか、そうじゃないのか。はは、どうやら私はまた早とちりをしたらしいね。

ミミ 分かっているんでしょう？ 分かっているって、わざとそんな事を言うんでしょう！ あなたは！

コウ 私は何も分かっちゃいないよ。だから、ただ淡々とそのノートに書いてある事を読み上げるんだ。

ミミ ……私たちがメシア様にお祈りしたら、息子の引きこもりが治って仕事が決まった。

コウ 弱いね。そんな、ありきたりのミラクル談じゃ、誰も引き付けられない。

ミミ でも、事実だわ。

コウ 短すぎるね。そんなんじゃ、1分も経たないよ。

ミミ だから、今日の前説は中止にしてください。

コウ 今さら？

ミミ まだ、エントリー取り消せるわ。

コウ 昨日、あんなに練習したのに？

ミミ 楽しかったわ。

コウ 私は苦痛だったね。

ミミ お願い、自棄にならないで。

コウ なっているのは、どっちだ？ 私か？ 君だろう？

ミミ 私になぜ？

コウ 本当は君だってタカの就職を喜んでなんかいないんだ、

ミミ 違うわ、

コウ 違うないさ、

ミミ 違うったら、

コウ 私達一家にとって、今回のミラクル談が最後の砦だからね。

ミミ せっかく家族が集まったのよ。皆で参詣するのよ。それだけで充分！

コウ ふん、きつと後ろ指刺されるぞ。出来損ないの家族だからね。

ミミ なんですって！？

コウ 出来損ないだろう。誰がどう見ても。

ミミ そんなことないわ！

コウ そんなことあるさ。亭主はご覧の通り、頼りなく情けない男だ。ミウラ氏と比べてみるよ。ど

うだ？ 私と比べてとても立派な人だ。

ミミ あなたは正直で誠実な人だわ！ だから結婚したのよ！

コウ 息子は無職の引きこもり、娘は異教の男と結婚して家を出た。全部、亭主たる私の責任だ。家族の中でマトモなのは君だけだよ。そんな君が、他の信者に後ろ指を刺されるんだ。コソコソ噂をされるんだ。肩身が狭いだらう？ 私は耐えられないね。だからこそ、今日はこのミラクル談で皆を見返してやるのさ。

ミミ タカちゃんもルナちゃんも立派な子よ！

コウ そうか。タカもルナも立派か。じゃあ、私だけか。立派じゃないのは。

ミミ そうじゃないってば！

ルナ (ようやく) やめて、・・・やめてよ！

コウ (ルナに) お前まで何を言いだすんだ？ 頭がおかしくなったのか？

ミミ コウさん！

ルナ やめて、・・・お願い。・・・喧嘩しないで。

コウ ふん、

やや間。

と、スーツに着替えたタカが降りてくる。

静まり返った空気に気付いていないのか、気付いていて敢えて無頓着を装っているのか、

タカ (ルナに) ルナ、どう？ 俺のスーツ姿。初めて見るだろ？

ルナ ・・・(仕方なく) ええ。素敵ね。

タカ 似合ってる？

ルナ うん。

タカ そうだ、折角だから写真撮ろうぜ。兄妹で。

ルナ ・・・写真？

タカ 父ちゃん、写真撮ってよ。ルナと二人で。(と、スマホをコウに渡そうとする)

コウ ・・・お前、私を馬鹿にしているのか？

タカ なんで？ 普通の事だろ。家族で写真撮るのは。あ、母ちゃんもどう？ 写真、一緒に。

ミミ (困って) タカちゃん、

コウ ・・・分かった。撮ってやるよ。貸せよ、カメラ。

タカ サンキュー。(コウにスマホを渡す)

コウ ほら、ルナもタカの横に並びなさい。(ミミに) お前も早く、そこに立って。

ミミとルナ、仕方なくタカの横に並ぶ。

コウ (撮ろうとするが)・・・笑えよ、3人とも。せつかく写真撮るんだから。

タカ 笑ってるよ。早く撮ってよ。

コウ ・・・それがお前の本気の笑いか？

タカ え？

コウ もっと笑えよ。満面の笑みで。

タカ だから笑ってるって。

コウ どこが笑ってるんだ。顔、引きつってるぞ。

タカ 父ちゃん、

コウ 嬉しいんだろ？ 念願の会社に受かって。営業やるんだろ？ だったら、もっともつと笑えよ。私がお前の立場だったら、もつともつと笑うぞ。

ミミ あなた、

コウ なんだよ、嬉しくないのか？ タカがスーツ着てるんだぞ。ルナが帰って来たんだぞ。だから、笑って写真を撮らないと。(タカに)ほら、早く笑えたら。なに？ 笑う事すらできないのか？

お前は。

タカ ……ごめん、もういいよ。俺が悪かったよ。

コウ 何がもういいんだ？ 何が悪かったんだ？

タカ ……ちよつと俺も意地になっちゃって。

コウ 気にはすることはないさ。さ、早く写真を撮るぞ。ルナもミミも、もつと笑いなさい。笑えるだろ？ タカが受かったんだから。

ルナ ……ねえ、もうやめようよ。

ミミ そうね、……コウさん、何か変よ。

コウ 変？ 私が？

ミミ ……ええ。

コウ (ルナに) 私は変なのか？ ルナ。

ルナ 誰が変とかじゃなくて、……嫌なの、このギスギスした感じ。

コウ ギスギス？ 何が？ 私は、ただ写真を撮ろうとしてるだけだよ。家族写真を。それも、皆が笑ってる写真をね。なのに、お前たちとききたら、ちつとも笑わない。何故、笑わないんだ？ なんでそんなに非協力的なんだ？

タカ 父ちゃん、ほんとにもういいよ。

コウ ……ふふ、ふふふ。ホント、お前たちは自分勝手だよ。

ルナ パパ、

コウ 馬鹿々々しい。

少し気まずい間。

コウ ……(タカのスマホを持ったままなので) ほら、

タカ (受け取って) ごめん。

コウ ……今、何時だ？

タカ (スマホの時計を見て) 6時過ぎ。

コウ (ミミに) ……すまなかったよ。

ミミ え？

コウ ちよつと取り乱したんだ。

ミミ ……私も、ごめんなさい。

コウ で、今日、私はどうすればいい？

ミミ あなた、

コウ 前説、せつかく君が書いてくれたんだ。君の意見に従うよ。やるならやるし、やらないならそれでもいいさ。

ミミ ……今日は、中止にしてください。お願い。

コウ そうか、残念だ。

ミミ ……ごめんなさい。

コウ いや、仕方ないよ。嘘は付けないからね。

ミミ うん、

コウ、徐にテーブルのワインを飲みだす。

その行為に対して、

ルナ パパ！

コウ うん？

ルナ ……お酒、飲んじやダメだよ。

コウ なぜ？

ルナ なぜって、……パパの車で行くんでしよう。今日の幸せの家。

コウ もう飲んでしまった。グラス一杯分。

ルナ パパ、どうしてそんな、

ミミ (遮って) ルナちゃん、

ルナ ママ、

ミミ もういいの、大丈夫だから。

ルナ でも、皆で行くんでしよう。私、楽しみにしてたのよ、

ミミ ええ、きっと皆で行くわ。タカちゃんも、ね。

タカ あ、ああ。

コウ 中止って言ったじゃないか。

ミミ だから、それは、

コウ (遮って) 言ったよ、君は。確かに言ったんだ。今日は中止にするって。従って、私の飲酒は全く問題ない。(と、またワインを飲む) ……ふう、グラス2杯分は飲んだかな。 ……ふう、もう運転はできない。いや、いいよ。行くなら行くよ。君が中止って言ったのを撤回してくれば、それはそれで君の意見に従うよ、私は。

ミミ ……(また口論になりそうな気配を避けるべく、努めて冷静に) 行きましょう。前説は中止だけど、幸せの家には皆で行きます。

コウ (さらにワインを飲んで) そうか、行くか。ふふ、グラス2杯半のワイン。だいぶ、酔ってきただなあ。これで運転すれば確実に飲酒運転だ。でも、いいさ。私の車で皆で行こうな。

ミミ あなた、

コウ 別にヤケクソになってるわけではないよ。

ミミ もう止めましょう。 ……これ以上飲んだら、あなたの体調も心配だわ。

ルナ (ミミに) ママ、 ……パパ、きっと疲れてるのよ。

ミミ ええ。 ……そうね。

コウ (タカに) タカ、
タカ えっ、

コウ お前も飲みなさい。就職祝いだ。(グラスにワインを注いでタカに渡そうとする)

タカ ……俺はいいよ。

コウ 良いワインなんだよ、これは。クローガーさんの友達に頂いたワインなんだから。

タカ クローガーさん？

コウ の、友達。

タカ 知らないけど、…それに俺、酒の味とかよく分かんないし。

コウ そうか。酒の味知らない奴に飲ますのは勿体ないな。せつかく良いワインなのに。だから、私が飲もう。(と言って、また飲む)

タカ (流石に心配して) 父ちゃん、

コウ ふふふ、グラス3杯、いや3杯半！

タカ・ミミ・ルナ ……

コウ、少しふらつく。

ミミが介抱してやる。

ミミ あなた、大丈夫？

コウ 大丈夫だよ。

ミミ 飲み過ぎよ。無理しないで。

コウ 無理なんてしていないさ。私はプロだよ。もう20年以上、バスを運転してるんだ。お前たちを養うために。

ミミ 分かっているわ。

コウ だから、私の車で皆で行こうな。

ミミ ……少し、休んで。

コウ 休む？

ミミ まだ時間はあるわ。上で寝てらして。

コウ 起こしてくれるのかい？

ミミ ええ。

コウ 私の車で行くだろう？

ミミ ……タクシーを呼びます。

コウ ……なぜ？

ミミ ……なぜでもよ。

コウ ……そうか。

コウ、千鳥足で玄関の方へ。

ミミ あなた、どこへ行くの!？

コウ (振り向いて) 散歩をしてくる。

ミミ ダメよ、危ないわ。

コウ 大丈夫だよ。子供じゃあるまいし。

ミミ でも、フラフラじゃない。

コウ 散歩したいんだよ。私は。

ミミ でも、

コウ 散歩するんだよ！ 私は！

コウ、出ていく。

心配になったルナが「パパ！ パパ！」と呼びながらコウの後へ続く。

残ったミミとタカ。

タカ ……（誰にともなく）ごめん。

ルナ えっ？

タカ 母ちゃん、ごめん。

ミミ タカちゃん、……なんで謝るのよ？

タカ ……俺のせいだよな。

ミミ ……タカちゃんは何も悪くないわ。

タカ 父ちゃんに挑発的な態度とっちゃったから、

ミミ 謝らないで。

タカ 俺、やっぱりまだ恥ずかしいんだ。

ミミ ……何が？

タカ ……（ノートを手にして）これ。

ミミ ……そう。

タカ 恥ずかしくてちやいけなくて気持ちもあるし、いや、そもそも別に恥ずかしがるようなことじゃない、ってのも何となく分かるんだけど、でも、

ミミ （遮って）もういいじゃない。今日は前説も中止だし、そのノートもお役御免だわ。

タカ ノートの内容云々じゃなくて、……なんていうのかな、その、さっき上で父ちゃんと口論になったのも、……実はもっと根本的な問題で、俺、ずっと目を逸らしてきたけど、……例えば、俺、ようやく来月から会社員になって、そこで、色んな人に出会おうと思うんだけど、……まあ、別に出会う人、全部が全部、深い関係になるとは限らないし、俺って、そういうの苦手だし、……でも、何人かとは結構、深い仲になる事もあると思うんだ。……だって、会社ってそういう所だし、いや、会社行ったことないから想像だけどさ、……その、仕事の話とか、……れ、恋愛とかもするかもしれない、……いや、分かんないけどさ、……その時に、俺ってどういう人間かってのを、やっぱり、こう、親しくなった人とかに説明するのがさ、……母ちゃん、聞いている？

ミミは、上の空。

タカ 母ちゃん？

ミミ (ハツとして) ごめん。母さんも、ちょっと疲れちゃって、・・・
タカ・・・そうだよな、

やや間。

と、表で「ドンッ」という衝撃音が鳴る。

ミミとタカ、目を見合わせる。

ミミ 何？ 何の音？

タカ 何かぶつかっただんじゃね？

ミミ 何がよ？

タカ 知らないよ。

と、青ざめたコウが帰って来て、

コウ (震えながら) ルナが、ルナが、

ミミ あなた！ どうしたのよ！？

コウ (震えながら) 私の、私のせいなんだ、

ミミ ルナがどうしたの！？

コウ (錯乱しながら) 事故だったんだ、私が、私が、

ミミ あなた、しっかりして！ ルナは、ルナはどこ！？

コウ (錯乱しながら) 私が、車を無理矢理出そうとして、ルナは、それを、止めようとして、

タカ さっきの音、まさか、

コウ 私のせいだ、私の、

事態を理解したミミ、急いでルナの様子を確認しに行こうとする。

タカ 母ちゃん、

ミミ タカちゃん、あなたは救急車を呼びなさい！

タカ あ、ああ、

ミミ、急いで退場。

タカ、救急に電話をする。

タカ もしもし、もしもし！ 救急です！ 妹が、妹が、すぐ来てください！ ええ、アイザック家で
す！ 西海岸のサン＝ヴェルデ町の、えーと、今、母ちゃんが、あ、母が確認に行つて、そ
の、父ちゃんの車、ええ、父の運転する車に当たっちゃったみたいで・・・、

タカが電話で状況を説明している間もコウは錯乱状態。

しかし、祈りのスペースまで行き、

コウ
（呂律が危ういが）アテベイベ・オブリガード・ウパニジャッターナ・アテベイベー・オブリ
ガード・ウパニジャッターナ、東のメシア様、西のメシア様、私は、私は、娘を、大切な娘を
轢いてしまいました、おお、どうか、どうか、娘の命を救い給え、そして、私を罰し、私を赦
し給え、アテベイベ・オブリガード・ウパニジャッターナ、・・・

コウの祈りの途中から救急車のサイレン音。
サイレン音がマックスになった所で暗転。

③

同じ場所。

前場から半年後。

朝。ミミとタカがテーブルに向かい合って食事をしている。
タカはスーツ姿。

ミミ ……緊張してる？

タカ いや。してない。

ミミ そう。・・・パンのお代わり、どう？

タカ 食う。

ミミ (パンを取ってタカの皿の上へ) はい、

タカ ありがと。

ミミ ちゃんと食べとかなないと。話してる途中でお腹鳴ったら恥ずかしいでしょうに。

タカ ああ、そうだね。

ミミ ……ねえ、本当に緊張してないの？

タカ うん。してないよ。

ミミ でも、今日は大尊師の就任十周年式典だから、きっと沢山の人が来るわ。全国から信者さんが集まるのよ。

タカ 集まるつつつても、首都圏の本部にしろ？ うちには西海岸地区じゃん。

ミミ 馬鹿ねえ、オンライン中継で全国の支部と繋がってるのよ。本部の様子も、スクリーンで確認できるし、西海岸地区の様子も本部から見れるんだから。

タカ そうだったんだ。てっきり、西海岸地区の人だけかと思った。俺の前説聞くの。

ミミ だから、母さん心配なのよ。

タカ 俺の事、信用してくれよ。

ミミ 信用はしてるわ。でもタカちゃん、大勢の前で話すの初めてだから、

タカ 慣れてるよ、俺。

ミミ 慣れてる？

タカ ああ。会社でやらされてるから。

ミミ タカちゃん、…あなた、まさか会社でいじめられてるの？

タカ 違うよ、朝礼だよ。

ミミ 朝礼？

タカ ああ。朝礼の挨拶。順番が回ってくるんだよ。俺も何だかんだで5回ほどやったからね。

ミミ 朝礼って、何を話すの？

タカ まあ、目標とかノルマとか色々。

ミミ タカちゃん。あなた、立派になって。母さん、とても嬉しいわ。

タカ 同期の中じゃ、俺が一番劣等生だけどね。

ミミ そうなの？

タカ 営業の成績、一番悪いから。

ミミ でも、まだ半年しか経ってないでしょう。まだまだ、これからじゃないの。

タカ まあ、ボチボチ。

やや間。

ミミ タカちゃん、

タカ 何？

ミミ ……これ、(と、ノートを渡す)

タカ (受け取って) 何、これ？

ミミ 今日の前説の参考になると思ってる。

タカ 母ちゃん、
ミミ ちよつと目を通してみて。

タカ (ページをパラパラ捲りながら)・・・なんだよ、これ？

ミミ ミラクル談のテンプレートよ。

タカ テンプレート？

ミミ 5つくらいパターンがあるから、好きなのを選べばいいわ。空白の所は固有名詞を入れて、後はそのまま読めば、ある程度、ミラクル談の形になるわ。・・・まあ、今回は無難にパターン①でいくのはどうかしら？

タカ ・・・母ちゃんの気持ちは、有難いと思う。

ミミ 母親だから当然よ。で、パターン①だけど、要約すれば「大切な人が事故で大怪我をしたけど、メシア様にお祈りをしたら奇跡的に治った」って話なの。・・・まあ、有りがちではあるけど、その分、一定の効果は見込めるわ。

タカ あの、・・・母ちゃん、俺、

ミミ もちろん、ここで言う「大切な人」はルナの事よ。パターン①でいいなら、それを元に母さんが清書してあげる。

タカ 清書って、・・・そんな時間ないだろ？

ミミ 午後からだから、まだ充分間に合うわよ。

タカ ・・・そっか、

ミミ もちろん、タカちゃんが別のパターンがいいって言うなら、それでもいいけど。まあ、でもね、パターン①が、やっぱり一番無難で良いと思うの。・・・ルナの事もあったわけだから。説得力あるでしょう。

タカ ・・・これ、全部母ちゃんが考えたの？

ミミ 昔にね。・・・毎回、信者さんのミラクル談を聞いてたら、ある程度のパターンが絞れることに気付いたの。・・・ふふ、こんなのに気付くのは、毎回真面目に参詣してる私やコウさんだけだわ。

タカ でも、父ちゃんは、

ミミ 何？

タカ いや、なんでもない。

やや間。

ミミ ねえ、タカちゃん。

タカ えっ？

ミミ ちよつと、読んでみなさい。本番の前の練習よ。

タカ で、でも、

ミミ いいから、早く。

タカ ・・・(仕方なく読む) 皆さんこんにちは、マルマルです。

ミミ そこは、タカちゃんの名前を言いなさい。

タカ ・・・皆さんこんにちはは、タカ・アイザックです。先日、僕の大切な人が事故に遭いました。

大切な人とは、……マルマルのマルマルです。

ミミ (呆れて) タカちゃん、分かるでしょう？ それとも、わざとやってるのかしら？

タカ なんだよ？

ミミ マルマルの部分は補足して読みなさい。それくらいの読解力はあるでしょう。

タカ 分かんないよ、マルマルのマルマルって言われても。

ミミ 「妹」の「ルナ」しかないでしょうに……さ、もう一回。

タカ ……(読む) 皆さん、こんにちば。タカ・アイザックです。先日、僕の大切な人が事故に遭いました。大切な人とは妹のルナです。……ルナは街を散歩中、後から走行して来た車に轢かれました。ドライバーの不注意が原因です。それですぐに、救急車に運ばれましたが、かなりの重傷で、回復は絶望的でした。お医者様も最善を尽くすと仰ってくれましたが、正直、素人の目から見ても絶望的で、治る見込みはないと思っておりました。僕はとても悲しみました。集中治療室のベッドで意識不明のまま横たわっている妹を見ながら、最悪の事態を覚悟しました。しかし、僕は諦めませんでした。メシア様にお祈りをしようと思っただけです。きつとメシア様が助けて下さる。そう思って、病院の廊下で何度もメシア様にお祈りをしました。そしたら、奇跡が起きました。ミラクルが起きたのです。なんと、妹の意識が戻ったのです。半ば諦めていたであろうお医者様自身もビックリしておられました。それから、お医者様の懸命な治療により、妹は一命を取り留めました。僕はミラクルが起きる瞬間をこの目で見ました。僕がメシア様にお祈りした結果、妹の意識が戻ったのですから。皆さまも、もし、大切な人が不幸な目にあっても、絶望しないでください。誠心誠意、メシア様にお祈りをすれば、きつと、ミラクルは起こります。日々の信仰を大切にしてください。以上を持ちまして、僕のミラクル談とさせていただきます。……(ノートを閉じる)

少し沈黙。

ミミ うん、……まあ、悪くないわね。ただ、タカちゃん。あなた、もう大人なんだから一人称は

「僕」じゃなくて「私」にしないさい。

タカ ……嘘じゃないか。

ミミ え？

タカ こんなので、何から何まで嘘じゃないか！

ミミ タカちゃん、どうしたのよ？

タカ はは、……母ちゃん、分かんないの？ 俺が今、何を思っているか。

ミミ ……ごめん。

タカ 謝るなよ。

ミミ ……私、嬉しかったのよ。タカちゃんが自分から「前説をする」って言ってくれたのが。だから、つい、

タカ 本心で言ったんだ。

ミミ えっ？

タカ ……俺が前説をしたって言ったのは、本心だよ。

ミミ ええ。分かっているわ。

タカ ……母ちゃんは、ちつとも分かってないよ。
ミミ ……不安なの。

タカ 不安？俺が前説で何を話すか分からないから？

ミミ ……全部よ。

タカ 全部？

ミミ あなだが、…タカちゃんが、最近毎日お祈りしてるのも、大尊師のご本を読んでも、今日の式典で自分から「前説する」って言い出したのも、…うん、もつと遡って、引き籠りから抜け出して毎日、きちんと会社に行ってるのも、…なんだか全部が上手く行き過ぎて不安なの…。

タカ ……今日の前説、自分の言葉で喋るよ。母ちゃんには悪いけど。

ミミ ……私に悪いなんて言わないで。

タカ でも、安心してくれよ。ちゃんと空気は読むから。

ミミ 空気ですって？

タカ 母ちゃんが、他の信者さん達に後ろ指刺されるような事は言わない。いや、母ちゃんだけじゃなくて、…父ちゃんやルナの名誉が傷付くような事も言わない。…と、思う。

ミミ タカちゃん、…何を話すつもり？

タカ ……最近、思ってることだよ。

ミミ ……最近、思ってること？

タカ いや、…ずっと思ってた事かもしれないね。

ミミ 少しでも教えてちょうだい。…タカちゃんが何を思ってたのか。…皆の前で話す前に。

タカ ……(少し笑って) いや、困ったな。

ミミ 何？

タカ いや、こんな風に正面切って聞かれると中々、…単に思ってることを言葉にするだけなのに。…はは、俺、ダメだなあ…母ちゃん一人の前でも言葉が出てこない。

ミミ タカちゃん、

タカ なんか、ボンヤリと纏まってはいるんだけどね。2つか、3つ。モヤモヤした煙の塊みたいなのが、こう、ボンヤリと頭の中に浮かんで、それぞれ独立してるんだけど、微妙に重なって、…いや、3つだ。3つは確実にあるんだ、今日、絶対話そうと思ってる事が、でも…うん。いや、言うよ、一つ目は、やっぱり、半年前の事を話すつもり。

ミミ ……やっぱり。

タカ うん。

ミミ どうしても話すのね。

タカ ……あの時、俺、自分でも信じられないけど、メシア様に祈ったんだよ。ルナが助かりますようにって。

ミミ でも、それじゃあ、

タカ (遮って) 大丈夫。父ちゃんが酒飲んで酔っちゃったなんて事は言わないから。…だから、内容はさっきの母ちゃんが用意してくれたテンプレートと変わらない。でも、自分の言葉として話したいんだ。ノートなんて見ずに。

ミミ ……二つ目は？

タカ 二つ目は、・・・会社のこと。

タカ タカちゃん、仕事、頑張ってるもんね。・・・母さん、一時はどうなるかと思ったけど、毎日仕事に出掛けるタカちゃんを見て、本当に嬉しいの。

タカ ・・・・仕事は辛いよ。

タカ ・・・・辞めたい？

タカ と、思う時もある。先輩、恐いし。

タカ ・・・・でも、続けてるじゃない。・・・偉いわ。

タカ ・・・・会社、別に楽しくはないし、今の仕事が自分に向いているとも思わない。・・・で、当たり前だけど、同僚とは仕事の話をするんだよ。俺、正直、人と話すの苦手だし、殆どの同僚とは、必要最小限の仕事の話だけで終るんだけどさ、・・・でも、たまに仕事以外の話をする人もいて、・・・でも、俺、ずっと引き籠ってたからさ、正直、プライベートな話題があんまりないんだ。だから、折角、仕事以外の話をした同僚とも、あまり盛り上がらなくて、また次の日からは、仕事の話しかしなくなってる。・・・でも、そんな中でも、同期入社の人と女、それぞれ一人ずつ、奇跡的に仲良くなった人がいて、・・・その二人には、自分が引き籠ってた話とかも、なんか打ち明けることできて、・・・こういうのを友情っていうのか、分かんないけど、・・・初めて友達ができた感覚がして、・・・いや、何が言いたいのかっていうと、深い関係が、この二人とは築けてて、・・・いや、俺の思い過ぎかもしれないけど、でも、実感としては、本当に、この二人とは仲良くてさ、・・・男の方はトミーって奴で、女の方は、シンディーって子なんだけど、・・・もう、白状すると、俺、シンディーには、れ、恋愛感情抱いてて、・・・だから、・・・あ、・・・人並みに付き合いたって思ってるし、いや、多分、無理だとは思うけど、・・・でも、もし方が一、方が一だよ、シンディーと付き合うことになったり、その先の結婚とかってなると、自分の事、全部さらけ出さなきゃダメだろ。・・・このメシア様の信仰の事だって、ちゃんと説明しなきゃ、・・・でも、俺まだ、心のどこかに恥ずかしさがあったって、・・・メシア様の事をシンディーに話したら、シンディー、引いちゃうんじゃないかとか、怪しい団体に入ってるって思われるんじゃないかとか、そんな事が心配で、・・・それは、俺自身がまだまだ、メシア様の事を信じ切れてないから、って自覚はあるんだけど、でも、一方で、俺自身、ルナが父ちゃんの車に轢かれて事故った時に、なんか心の底から自然にメシア様にお祈りしてたから、で、実際、ルナは一命を取り留めたからさ、・・・だから、自分が好きな人には、そういう、なんてーか、メシア様の教えの素晴らしさとか、お祈りしたらミラクル頂けるんだって、そういう、素晴らしいさを、自分が好きな人にはやっぱり分かって欲しくて、だから、その、シンディーに対しては、恥ずかしくて言えない、言いたくない、っていうのと、メシア様の教えを自分から説明したいって気持ちがある中で矛盾なく存在してて、その葛藤みたいなことを、前説で喋ってみたいなって思ってる、・・・母ちゃん、俺、何言ってるか分かる？

タカ ・・・・分かるわ。

タカ ・・・・本当に？

タカ ・・・・分からないけど、分かるうとはしているわ。

タカ ・・・・分かったよ。・・・なんか、母ちゃん、俺のそういう話には興味ないと思ったから。私には、そんな選択肢はなかったわ。

タカ えっ？

ミミ でも、今の若い人たちのことは理解しなきゃいけない。時代は変わっていつてるんだから。タカ (意味が分からず、取り敢えず) う、うん、

ミミ でも、結果的にコウさんと結婚して良かったと思ってる。あなたとルナが産まれてきたんだから、・・・

タカ 母ちゃん、

ミミ 飲酒と同じね。

タカ 飲酒？

ミミ 昔は禁止されてたのよ。飲酒も、信者以外の人との恋愛も。だから、私にはコウさんしかいなかった。

タカ ・・・そうだったんだ、

ミミ 今度、時間がある時に読んでみるといいわ。

タカ えっと、・・・何を？

ミミ 信仰の手引きよ。ちゃんと読んでる人は少ないけど、毎年少しずつ改定されてる。

タカ そんなのがあるんだね、

ミミ ええ。時代に合わせて柔軟に・・・。社会と共存するために、試行錯誤を繰り返している、・・・決して怪しい団体じゃないわ。

タカ それは、分かってるよ、・・・別に怪しいとか、俺は思っていないけど、

ミミ 俺は思っていないけど、周りには思ってる。って言いたいのかしら？

タカ いや、・・・の可能性もある、と思う、

ミミ タカちゃんもっと自分に自信を持ちなさい。周りにどう思われようと、自分が信じてるなら、それでいいでしょう。

タカ ・・・ま、そういうのも含めて俺の性格の弱いところだよ。

ミミ ・・・ローザちゃんではいけないの？

タカ えっ？

ミミ どうしてもシンディーって子じゃなきゃいけないの？

タカ ローザさんは、

ミミ タカちゃん、ローザちゃんのことを好きだったんしょう？

タカ やめてくれよ、母ちゃん、

ミミ ローザちゃんなら、隠すことも曝け出すこともないでしょう。信仰の事を。

タカ ・・・今は、シンディーが好きなんだ。

ミミ そう。

タカ うん。

ミミ 結局あなたもルナも、・・・いや、いいわ。母さんの考えが古いだけだから。

タカ 母ちゃん、

ミミ 気にしないで。

タカ うん、・・・

やや間。

ミミ ……3つ目は？

タカ え？

ミミ 今日の前説。

タカ ……ああ。

タカ、暫く考えこむ。

ミミはじつと待っている。

やがて、

タカ ……(内ポケットから手紙を出して) これ、

ミミ 何？

タカ ……リード君からの手紙。

ミミ (やや顔が曇るが、冷静に) ……どうして、リードさんの手紙をタカちゃんが持つてるの？

タカ ……俺の方から手紙出したんだ。その返事。…やり取りは、その一度だけだけ。

ミミ ……あんな薄情な人と？

タカ ……ルナがまだ入院してる時、見舞いに行ったらリード君がいて、…ルナを間に挟んで、

二人で少し話して、…ちゃんと話したのって、多分、あんま無かったけど、…なんか、

照れ臭いしね、妹の旦那って。…いや、その時はまだルナと離婚する前で、

ミミ ……聞きたくないわ。

タカ うん。…だよな。

ミミ ええ。

タカ ……やめとく。

ミミ ええ。

タカ 参考になると思ったんだ。…リード君の手紙が、自分の今感じてる事の手掛かりに。だから、

前説で紹介しようと思って。

ミミ やめてちょうだい。そんな馬鹿なことは。

タカ でも、

ミミ (遮って) やめてちょうだい。

タカ 母ちゃん、

ミミ (もう一度、目を見据えて) やめてちょうだい、…そんな馬鹿な事をするのは。

タカ ……うん、…分かった。

ミミ それでいいわ。

タカ ……俺、どうかしてたよ。

ミミ え？

タカ なんか、力尽きた。…母ちゃんと、これだけ沢山話したから、もうなんか、皆の前で何か

主張したいって気分でもなくなっちゃった。

ミミ タカちゃん、

タカ 大丈夫、前説はちゃんとするよ。

ミミ 無理はしないで。

タカ ……誰かに聞いて欲しかったんだと思う。ずっと避けてたから。自分から話すのを。それをいきなり、大勢の前でなんて虫が良すぎるよな。荷が重いつてもあるし。第一、やっぱ俺には向いてないよ。自分の言葉で前説するなんて。母ちゃん一人で充分だった。

ミミ 私はタカちゃんの母親よ。人生の先輩でもあるわ。

タカ うん。

ミミ 何でも相談して頂戴。

タカ ああ。でも、俺ももつとしつかりしなくちゃいけないって自覚はあるから。

ミミ じゃあ、せめてメシア様の事で悩んでる時は、私に相談なさい。

タカ うん。…母ちゃん、

ミミ なあに？

タカ 今日の前説、そのテンプレート使うよ。パターン①で。

ミミ ええ。その方が賢明だわ。

タカ 清書は大丈夫。なんとかなるよ。

ミミ ようやく、分かってくれたのね。母さん、嬉しいわ。

と、パジャマ姿のコウが降りてくる。

どこか生気がない。

ミミ (気付いて) お早う、あなた。

コウ うん。…お早う。

タカ お早う、父ちゃん。

コウ タカ、…お早う。

ミミ 今日は、朝ご飯食べる？

コウ ああ。…頂くよ。

ミミ 適当に食べて。食べ終わったら、洗って片付けといてね。

コウ うん。(コウ、テーブルの朝食をゆっくり食べ始める)

タカ ……ご馳走様。

ミミ あら、もういいの？

タカ ああ、お腹いっぱい。

ミミ そう。

タカ ……もう、タクシー呼んでいいかい？

ミミ そうね、ちょうどいい時間だわ。

タカ、タクシー会社に電話する。

タカ もしもし。アイザック家です。ええ、サンヴェルデ町の。今から一台お願いします。どうも。…(電話を切って、ミミに) もうすぐ来るってよ。

ミミ ありがとう。

タカ 母ちゃんも早く支度しなきゃ。
ミミ ええ、・・・私は、このままでいいわ。
タカ そっか。

タカ、立ち上がる。

ミミ どこ行くの？

タカ 表でタクシー待ってるよ。

ミミ ここで待ってればいいじゃないの。

タカ ウチの場所、分かりにくいだろう。前も一度、運転手さん迷ってたから。

ミミ なんて優しい子だろう。

タカ、玄関へ行こうとする。

ミミ、呼び止めて、

ミミ タカちゃん、

タカ なに？

ミミ (タカの方へ駆け寄り) ネクタイが曲がっているわ。(直してやる)

タカ ああ、ごめんよ。

ミミ はい、これで完璧。

タカ じゃあ、中で待ってて。

タカ、退場する。

ミミ、席に戻り、

ミミ ・・・すごい成長だと思わない？

コウ ・・・。

ミミ ねえったら！

コウ うん？ あ、ああ、私に言ってるのかい？

ミミ あなたしかいないでしょうに。

コウ そ、そうだね。

ミミ 半年前まで引き籠ってたタカちゃんがよ、他人の事まで気に掛けられる男になるなんて。

コウ 他人？

ミミ タクシーの運転手よ。

コウ ああ、

ミミ メシア様のお陰だわ。

コウ ・・・タカのやつ、自分から言い出したのか？

ミミ そうよ。さっき聞いてたでしょう。上の空なんだから。

コウ いや、そうじゃなくて、・・・前説だよ。

ミミ ああ、今日の事？

コウ うん。

ミミ そうよ。

コウ ・・・何を話すつもりなんだ？

ミミ あれからの事よ。

コウ あれから？

ミミ ええ。あれから、色々あったでしょう。色々あり過ぎておかしくなるくらいに。

コウ ・・・例えば、．．．例えば何があった？

ミミ 嫌だわ、あなた。．．．忘れちゃったの？

コウ いや、．．．私が酒に酔って、ルナを轢いてしまったことか？

ミミ それもあるわね。

コウ そんな事を、タカは今日話すのか？．．．そんな事を、あいつは皆の前で話すのか？

ミミ 嫌なの？

コウ ・・・君は、嫌じゃないのか？

ミミ どうして？

コウ 親が子供の人生を滅茶苦茶にしたんだぞ。いや、私がルナの人生を滅茶苦茶にしたんだ。

ミミ そうね。

コウ 恥だとは思わないのか？

ミミ あなたのおかげで、ルナはあの男から離れる事ができたわ。そして、私達の元へ帰って来たじ

ゃない。すごいミラクルよね。

コウ でも、ルナは．．．まだ歩くことも困難だ。

ミミ ええ。毎日毎日、リハビリを頑張ってるわ。メシア様にお祈りしながら。

コウ もう一度君に確認させてくれ。本当にタカは、半年前の事を全部話すのか？

ミミ さあ、．．．何を話すのかしらね。．．．気になるなら、あなたも来ればいいじゃない。

コウ いや、．．．私はやめておくよ。

ミミ どうして？

コウ なんだか気分が乗らないんだ。

ミミ ・・・そう。

コウ うん。

ミミ ・・・(ため息ついて) 安心なさい。都合の悪いことは喋らないように教育済みよ。

コウ なんだって？

ミミ (テンプレートのノートを見せて) これ、読むだけだから。

コウ ・・・．．．

ミミ 練習してないから多少不安だけだね。．．．でも、まあ、ただノート読むだけだから。それく

らいはできるでしょう、タカちゃんでも。

コウ ・・・．．．

と、表でクラクションが鳴る。

タクシーが到着したようだ。

ミミ じゃあ、私はタカちゃんと行ってくるわね。・・・幸せの家に。
コウ うん。

ミミ、立ち上がり玄関の方へ。

ミミ (振り返り) あ、そうだ。コウさん。

コウ うん？

ミミ あなた、今日も朝のお祈り忘れてるわよ。

コウ あ、ああ、・・・そうだった。

ミミ 行かないなら、せめてお祈りはしなくちゃ。

コウ そうだね。・・・君の言う通りだ。

ミミ じゃあ、お留守番宜しくね。

コウ うん。

ミミ、タカの待つタクシーへ。

リビングにはコウが一人。

しばらくの無為の時間が過ぎた後、コウ立ち上がり上手の祈りの空間へ。

コウ (天を見上げ)アテベーベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。アテベーベ・オブリガード・ウパニジャッターナ。東のメシア様、西のメシア様、お早うございます。本日も一日、我と我が家族をお守り給え・・・。

しばし、沈黙。

コウ、タカがテーブルに置きっぱなしにした手紙を見つけ椅子に座って読み始める。

コウ・・・(読む)タカ・アイザック様。お手紙有難う御座います。また、先日はルナの病室で義兄さんと、お話出来て嬉しかったです。あの病室でお話したような事は、実はルナと毎晩議論しているテーマでした。僕とルナは、いつも信仰について熱い議論をするのです。お義兄さんの前で、こんな事を言うのは甚だ無礼ではありますが、ルナは可愛い奴です。普段はとても愛くるしいのですが、メシア様の事となると、彼女は一步も引き下がりません。一方の僕は、幼い頃から無神論者であります。ニヒリストという訳ではありません。情熱を持って、神を否定しています。メシア様の事だけではありません。僕の両親は、いや、僕の国の国民は、殆どがブディズムという神に帰依しているのですが、僕は、その神をも否定する立場の者です。「信仰は人々を不幸にする」というのが、僕の考えです。ルナは「メシア様にお祈りすると皆、幸せになる」の一点張りですので、夜の議論はいつも平行線です。議論の最後に、ルナは必ず僕にこう言います。「リードは私のお兄ちゃんにそっくりね」と。僕にはずっと、その意味が分かりませんでした。ですが、先日、あなたと少しお話をして、ルナの言う意味が少し分かったような気がします。先日あなたが呟いた、ある言葉に僕はシンパシーを感じました。覚えてい

らっしやるでしょうか。あなたは、半ば不貞腐れたような感じでこう言ったのです。「何も考えずに、ただ信じるなんて俺にはできない。そんな事ができる器用な人間が羨ましい」と。実際は、こんな明瞭かつ論理的にはなく、小声でボンボンと、恨みがましい、ルサンチマンめいた口調で、吐き捨てるように呟かれたのですが、このあなたの言葉はなんだか、僕の根底にある思想に深く共鳴致しました。同時に、こんな状態になってしまったルナを幸せにできるのは、僕ではなく、あなただと思い、僕はルナの前から、・・・

と、コウが読んでいる途中から、白いワンピースを着たルナが降りてくる。

ルナは、足を少し引きずっている。

コウは気付かない。

ルナ、コウの背後に回る。

ルナ、コウの目に布を被せ目隠しをする。

コウ・・・ルナかい？

ルナ ええ。

コウ なんの真似だ？

ルナ それはリードが見さんの為に書いた手紙よ。パパが見ちゃいけないわ。（コウから手紙を取り上げる）

コウ 私は今日、幸せの家に行かないから・・・タカが何を喋るのかと思って、つい気になってね。

ルナ （手紙を破る）・・・パパ、自分の言葉で話して。

コウ・・・緊張するんだよ。私は上がり症だから。

ルナ 私しかないわ。

コウ 素面じゃとても無理だよ。

ルナ 仕方がないパパ。

ルナ、グラスにワインを注ぎコウに飲ます。

コウ、少しむせる。

コウ ルナ、

ルナ 素面じゃなくなったわ。さあ、早く。

コウ・・・その前に、一つ聞かせてくれ。

ルナ なあに？

コウ お前は、私を恨んでいるか？

ルナ まさか。

コウ でも私は、・・・お前の、・・・お前たちの人生を滅茶苦茶にしてしまった。

ルナ・・・決めてたのよ。名前はミコにしようって。

コウ えっ？

ルナ パパとママの名前から一文字取ったの。

コウ・・・ミコ。

ルナ ええ。女の子だったら、そうしようって。

コウ ……良い名前だ。

ルナ でしょう。

コウ だが、その子はもう、……私のせいで……、

ルナ ……(ため息ついて) リードの国ではね、「神に仕える女性」って意味もあるらしいわ。だから、ミコは今頃きつとメシア様の元で幸せに暮らしているはず。

コウ ミコ……、

ルナ だから、ね、パパを恨む訳がないでしょう。

コウ ルナ、

ルナ さあ、早く話して。

コウ ……(やがて観念したように目隠しをしたまま話し始める) 皆さん、こんにちは。コウ・アイザックです。今、私達一家は、バラバラに崩壊しようとしています。首の皮一枚で、なんとか繋がっている状態です。私達一家をギリギリ繋ぎとめている首の皮とはメシア様に他なりません。……正直に告白します。この状態はとても鬱陶しいです。ズタズタに切り裂いてやろうかなという衝動に駆られます。皆さまも、ご存知でしょう。私が誰より信仰心の篤い男だということ。そんな私がなぜ、こんな不埒な事を考えるのか。答えは、半年前に遡ります。半年前、私達家族に或る事件が起こりました。あの日、私は実の娘を、

と、ここまでコウが話したところで唐突に暗転。
おしまい。